

道路改良工事に伴う
第2次発掘調査報告

しも かも くら
下 鴨 倉 遺 跡

1990年3月

島根県

仁多町教育委員会

序

ここに文化財の調査記録を刊行するはこびとなった。

本町内には奥出雲の歴史を物語る古か所以上の遺跡が周知されている。特に縄文時代遺跡の密度は高く、石器・狩猟の上古から人跡を辿ることができる地域の貴重な遺産である。

このたび町内の道路改良により、たまたま重要遺跡である下鴨倉遺跡の地内にも施工が及ぶこととなった。工事計画段階から第一次の試掘調査、そしてこのたびの第二次発掘調査を行った。

発掘調査の成果は極めて顕著なものがある。数千年にも及ぶ縄文時代のほぼ全期間に相当する陰陽の各土器様式を網羅し、さらに遠く九州からの搬入品や近畿の様式もみられるなど、或いは石器製作址の石組み遺構の検出等枚挙につきない。

限られた紙数の報告書ではあるが、資料を充分に盛り込み、この成果が奥出雲の古代文化の解明はもとより、西日本の縄文文化研究に資するところ多大であると自負するところである。そしてこれらの貴重な遺産を消滅させることなく、次代へと継承することの必要性を改めて想うものもある。

この間、島根大学名誉教授山本清先生はじめ島根大学田中義昭先生、若月利之先生、広島大学河瀬正利先生、県文化課の方々の指導、地元の田部重夫氏など各方面にわたる協力援助を受けたことを心から感謝する。

平成2年3月

仁多町教育委員会

教育長 藤原成章

例　　言

1. 本書は、仁多町大字鴨倉に所在する下鴨倉遺跡地内の道路改良計画区域について行った発掘調査報告書であり、昭和55年度の試掘調査に続く第二次調査の成果である。

2. 調査は下記の体制で、昭和63年及び平成元年の2か年にわたって実施した。

調査主体者 仁多町教育委員会 教育長 藤原成章

調査指導 山本 清 島根大学名誉教授

田中義昭 島根大学教授

宮沢明久 鳥谷芳雄（島根県教育庁文化課）

調査担当者・補助員 杉原清一 藤原友子

調査事務局 川角俊夫 古川春男 川本健二（仁多町教育委員会）

3. 発掘調査は460m²で、昭和63年5月～7月及び平成元年5月～7月の2か年に分けて行い、引続いて平成2年3月まで随時遺物整理を行った。

4. 調査地点及び土坑内の土壤の分析と、出土した剝片石材の産地同定についてはそれぞれ次のように依頼した。

土壤分析 島根大学農学部 若月利之助教授

石器剝片 広島大学文学部 河瀬正利講師

5. 調査にあたり次のの方々から助言・協力を賜った。記して謝意を表します。

松本岩雄 足立克己 内山律大（島根県教育庁文化課）

河瀬正利 広島大学文学部

平野芳英 風上記の丘資料館学芸主任

田部重夫 仁多町文化財保護専門委員

坂本真貴子 大原郡木次町

本次農林事務所 仁多町農林課

6. 調査作業は次の方々によった。

佐藤工務所 福間工務店 森山恒憲 藤原芳市 古川貞子 吉川愛子

藤原一枝 松原長子 安部芳代子

7. 依頼して行った土壤分析の成果は、その報文を付編として本書に収録した。

8. 本書の地図等は仁多町地籍図座標に準拠したもので、磁北は示していない。

9. 遺物整理は調査者が行い、岩石の分類は坂本真貴子氏の協力によった。また本書の編集執筆は調査者が行った。

目 次

序	教育長 藤原成章
例 言	
I 調査に至る経緯と調査経過	(川本健二) 1
II 位置と環境	3
III 調査の方法	5
IV 造 構	8
3B-4B区の柱穴について-10A-11B区の柱穴群-9B-11B区の集石遺構-大型ピット	
V 遺 物	18
A 遺物の分布-绳文前期土器-中期土器-後期土器-晚期初期土器-晚期中期土器	18
石錐・チップ	
B 土器-前段・中期・後期・晚期前半特製器・晚期突唇文土器その他	24
粗製土器・土器底部・先生土鉢頭蓋・小結	
C 石器-石錐・石斧・石錐・その他石器・台石・小結	48
VI まとめ	60
付 編	
下鴨倉遺跡土壤分析結果報告書	島根大学農学部 若月利之 65

挿図目次

図1. 位置図	4	図17-1. 土器I-1	26
図2. 地形図	5	-2. -2	27
図3. 土層図	7	図18-1. * II-1	30
図4. 造構図	9	-2. -2	31
図5. 建物・柱穴ピット図	11	図19. * III	34
図6. 石組1	13	図20. * IV	37
図7. 石組2	13	図21. * V	39
図8. 石組4	14	図22-1. * VI-1	42
図9. 石組7	15	-2. -2	43
図10. 石組8	15	図23. * VII	45
図11. P 27(石組5)	16	図24. * VIII	47
図12. P 17(石組6)	16	図25. 石鎌・他	49
図13. 造物分布図(1)	20	図26. 石斧	53
図14. * (2)	21	図27. 石錐	55
図15. * (3)	22	図28. その他の石器	56
図16. * (4)	23	図29. 台石	59

表目次

表1. 3B~4B柱穴ピット一覧表	10	表6. その他の石器	57
表2. 石鎌計測表	50	表7. 台石計測表	57
表3. 石斧計測表	52	表8. 土器様式表	61
表4. 石錐測定値表	54	表9. 下鳴倉遺跡出土遺物集計表	63
表5. 石錐計測表	54		

I 調査に至る経緯と調査経過

下鴨倉遺跡は、縄文式土器の出土で知られた、山陰山間部を代表する重要な遺跡である。この遺跡の発見は、土地所有者である田部重夫氏が、昭和25年水田畔の補修をするため、耕作土を除いた下層の土から土器片、黒曜石を採取したことに始まる。その後、昭和30年島根大学山本清氏の調査を経て広く紹介された。

一方、昭和53年この下鴨倉遺跡内を経由して道路改良が計画された。町教育委員会は、直ちに関係機関と協議し、昭和53年国庫と県の補助を受けて、道路予定地内の緊急試掘調査を実施した。調査の結果、遺跡は道路予定地より西側にかなり広範囲に分布し、出土遺物も縄文時代前期からほぼ全期間にわたる土器、石器が検出された。

この調査結果をふまえ、県教育委員会と遺跡の取り扱いについて協議した結果、可能な限り現状保存をするように努めることとし、最終的に、現道を利用し拡張部を東寄りに最小限度にとどめることとした。この開発予定区域を昭和63年度、平成元年度の2ヶ年に亘り全面発掘調査を実施した。発掘調査の結果を踏まえ再度開発課と協議し、文化財保護との調整を図ることとした。

調査は仁多町教育委員会が主体となり、杉原清一県文化財保護指導委員に調査をお願いした。調査経費は2ヶ年とも町費で対応し、調査の経過は次のとおりである。

(63年度)

S63. 5.17～ 6. 3 試掘調査（調査面積30m²）

6. 3 現地指導会 県文化課鳥谷芳雄主事

7. 6 発掘調査打合せ会 町農林課

8. 1～ 9. 3 発掘調査（調査面積310m²）外業

8. 9 現地指導会 県文化課宮沢明久係長

8.30 現地指導会 県文化課宮沢明久係長

＊ 同上 内田律雄文化財保護主事

8.31 現地指導会 島根大学田中義昭教授

＊ 県文化財保護指導委員尖道正年

8.31 現地説明会 地元の人々はじめ70名参加、新聞社取材

9.26～10. 8 出土品整理、調査概報作成

(平成元年度)

H 1. 5.15～ 6.29 発掘調査（調査面積150m²）

6. 8 現地指導会 県文化課鳥谷芳雄主事

- 6.11 現地指導会 島根大学田中義昭教授
・ 広島大学河瀬正利講師
・ 県文化課鳥谷芳雄主事
- 6.14 現地説明会 発掘された縄文式土器多数展示、60名の参加、新聞
社取材
- 6.19 現地指導会 県文化課松本岩雄係長
同上 足立克己主事
- 6.20 現地指導会 島根大学山本清名講師教授
県文化課鳥谷芳雄主事
7. 4 発掘現場埋戻し（ポリフィルムで遺跡表面を保護し、発掘面を川
砂、真砂で区分した。）
7. 9～3.31 遺物整理、発掘調査報告書作成
- 8.17 遺跡の取り扱いについて県教育委員会へ協議
9. 4 遺跡の取り扱いについて本次農林事務所へ通知
12. 1 島根大学農学部若月利之助教授へ土壤分析を依頼
3. 1 石材の産地鑑定を広島大学へ依頼（サスカイト3点、黒曜石5
点）
- 3.23 現地指導会 島根大学若月利之助教授

2ヶ年に亘る発掘調査から、西は九州、東は近畿まで広範囲にわたる土器（又は土器様式）が検出された。又、おびただしい石器からは、隱岐、香川県との交流がうかがわれ、まさに、山陰と山陽の接点として中國地方の縄文時代を代表する重要な遺跡であることが裏づけられた。この遺跡を地元のほこりとして、今後、町の振興計画の中で検討し活用していくことが急がれる。

なお、本調査に関して各方面からご指導、ご援助をいただいたことに対し厚くお礼申し上げます。

（川本健二）

II 位置と環境

1. 位置

下鴨倉遺跡は島根県仁多郡仁多町大字鴨倉450番地に所在する。斐伊川の支流阿井川に沿った河岸段丘上に水田が拓かれたところで標高169mである。西1.5kmには縄文中期の平田遺跡があり、東方山頂には中世三沢氏の築った山城がある。

2. 周辺の遺跡

斐伊川上流域には多くの縄文遺跡が知られており、島根県内でもその密度は高い地域である。弥生時代の遺跡は横田盆地を囲むように点在し、仁多町域ではほとんど知られていない。

1) 縄文時代の主な遺跡

1. 平田遺跡(木次町)：昭和20年代学校敷地造成で、平木口式系・津雲A系など縄文中～後期の土器が出土した。
2. 蓬地遺跡(仁多町)：並置した倒立埋甕2体を検出。磨研土器・粗製土器等を伴い、縄文晚期初頭頃とみられる。
3. 宇根遺跡(仁多町)：昭和20年代初め頃調査され、黒色土層から磨消縄文・石斧など検出。
4. 王賀遺跡(仁多町)：県境近い国道沿いの谷間にあり、黒色土層から磨消縄文・磨研無文・粗製などの縄文土器と石斧等が出土した。
5. 国竹遺跡(横田町)：横田盆地を見下ろす丘陵上で、縄文早期の押形文土器が多数まとまって検出された。柱穴プランも認められる。上層からは弥生中期～古墳時代前期の遺構遺物を検出。
6. 下大仙子遺跡(横田町)：広い谷地形にある支丘陵上で、縄文早期の橢円押形文土器5片出土。遺構不明。
7. 竹崎遺跡(横田町)：広く集落内の下層土中から磨消縄文や粗製土器片が出土する。
8. 小万歳遺跡(横田町)：橢円押形文土器片出土地。
9. 龍の駒遺跡(横田町)：県境近い山間の谷川沿い、古くから磨消縄文・中津式土器の出土する遺跡として著名。
10. 宮田遺跡(三刀屋町)：並置した倒立埋甕2体と、それをとりまく柱穴プランや立石、土壙等の遺構と、中～後期及晩期縄文土器各種を検出した。島根県指定史跡及同指定考古資料。

位置図



位置と周辺の主な遺跡

(1:200,000)



下鴨倉遺跡付近地形図

(1:25,000)

11. 粟谷遺跡(三刀屋町)：農地改良工事で多数の縄文土器片出土、磨消縄文・縁帶文磨研無文土器等や凹石・磨石等あり。
12. 六重の石棒(三刀屋町)：地域内出土とみられる縄文時代の石棒が伝えられている。出土地点は不明。

2) 弥生時代の主な遺跡

13. 鹿谷遺跡(仁多町)：弥生中期初頭の櫛描多条沈線文の壺と甕の2点は東京国立博物館に収蔵されて著名である。遺構不明。
14. 代山遺跡(横田町)：盆地東端の丘陵上で凹線文の盛んな高環・壺などが出土。山陰地方弥生中期の標準土器として著名である。
15. 横田高校グランド遺跡(横田町)：盆地を見下ろす低丘陵上、弥生中期以降古墳時代末に至る多数の土器や石器等が出土、石包丁などもある。
16. 横田八幡蔵銅劍出土地(横田町)：中細型銅劍1口が、古く江戸初期に出土したところと伝う。銅劍は島根県指定考古資料。

III 調査の方法

発掘調査の範囲は現道の東側に沿った拡幅工事計画部分で、幅5～6m 延長約90m の狭長な区域である。

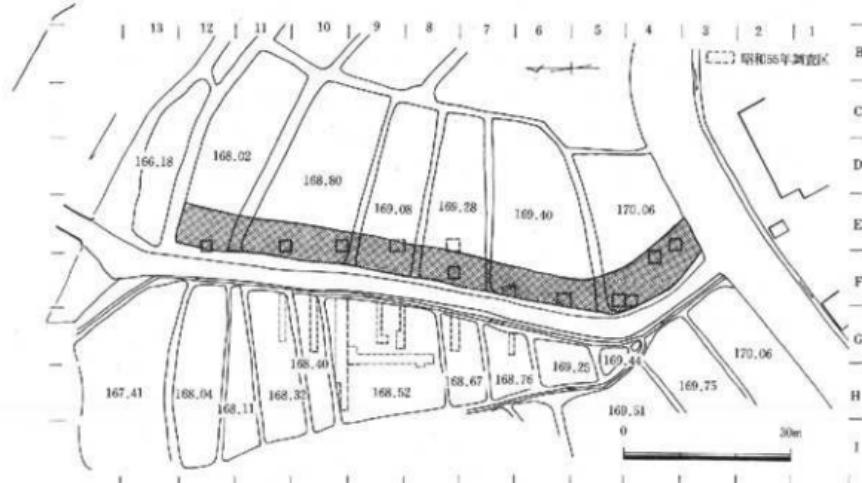


図2. 地形図

区の設定

調査区と標高等の設定は、昭和55年度行った第一次調査に準拠して復元設定した。EF列に相当するが狭長なためこれを省略し、単に4～12区の南北方向のみの区分とし、さらにこの各区をABに細分して呼称した。

発掘調査はグリッドによる試掘ののち、全面発掘を2ヶ年にわたって行った。

グリッド試掘

第一次調査の成果を参照しながら、4・5区、7区、11・12区に 2×2 m グリッドを設けて、南から北の川寄りに向かう地層と遺物・遺構の存否を検討した。その結果、山寄り5区までは耕作土下わずかで地山面に達するが、6区～11区は遺物包含層が厚く、地山は微細な川砂であり、12区はその地山を削って水田が拓かれていることが判った。

全面発掘調査

この結果から全面発掘調査の区域は4～11区とし、12区は遺跡の範囲外であり調査区から除いた。

発掘作業は耕作土を重機によって排除し、その下の黒褐色土層から行った。

各区の概況と土層配列

調査区を南高位区から北の低位区へと概観すると次のようである。

南寄りの山麓に近い3B～5B区は耕土下わずかで黄色粘質の地山に達する丘麓部分であり、6A区の礫群列の自然堤防から深くなり、黒褐色～黒色土が厚く、地山は河川による微細砂土となる。遺物は厚い黒褐色～黑色土層の中位以下で、北にいくほど包含している。特に8Aや9B区では黒色土下面に、作業の台石とみられる大きな川疊（円疊）を配置した部分がある。

10A区では地山が微細土から細～中疊でやや高まり、川の中洲状を呈し、11B区まで大小多数の川疊が散乱し、台石のほか焼石や石組みもみられた。

出土遺物もこの10～11区が最も多い。

このように調査地内の状況からして、5B区以南、6A～9B区及び10A区以北の三つに地帯区分できる。

1) 3B～5B区

上層は水田耕作土（鉢床層を含む）の下には若干の山疊や地山心土のブロックが混入する擾乱黒褐色土（7.5YRZ～3Y）（クロボク土）が厚さ20～30cmあり、その下には薄い黄橙

色 (10YR 5/4 ~ 6/4) 粘質の地山となっている。

この黒色搅乱土層は現水田より古い耕地の造成に際して搅乱されたものとみられるもので、一部では地山土面まで達するものであった。この地山面は 5 A 区まで勾配で緩やかに下りながら続くが、5 B 区は 1 段下の水出区のため地山心土に達する削平がなされていた。

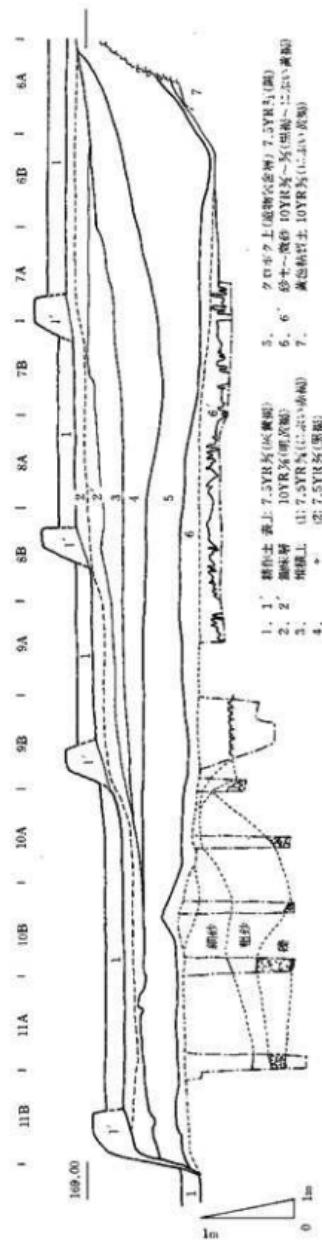
遺構は 5 B 区を除く、地山土表面において柱穴 16 が認められたが、建物プラン 1 棟分と柱列 1 条のほかはプランが明らかでない。これらの柱穴はおそらく黑色土中から穿ったものであろうが、上面は搅乱されており把握できなかった。

柱穴の落込み土中には縄文地の上層細片のあるものもあり、また搅乱土中から須恵器片 2 や寛永通宝 3、キセル 1 などが採取された。これからして、土層の大規模な搅乱は近世の耕地開拓によるものと思われる。

2) 6 A ~ 9 B 区

6 A 区から幅 2.2m の北に傾斜する川礫の面があり、これから深くなって地山は河川による微砂上が地山となる。6 B ~ 7 B 区が最も深く、現水田面から約 2.0m である。操作土下は北に向かって厚くなる褐色土層があり、その下は微砂土の地山まで厚い暗褐色 - 黒色となっている。この土層には中位以下に遺物を若干包含しているが、層位的な出土はしていない。

8 A ~ 9 B 区間の上層状況はそれまでと同様であるが、黑色土層下面に近く石礫が散在し、その一部は明らかに人工の部分があるも



ので、工作台とみられる磨耗面のある川石を含み、また打製石錘もやや多く出土するなど遺物の密度が増してくる。地山土である黄白色微砂が上方の黒色上下面にまで小杭穴状に上昇して斑点状となっている面が多くなり、地下水の上昇に伴い噴出したようにも見うけられるものであった。

土器片等の遺物は黒色上下層部に濃密であるが、明確な面として把握できなかった。

3) 10A~11B区

9B区の末端あたりから地山面がやや上昇するとともに、微砂から細砂そして砂礫土へと漸移して、河川の中洲状を呈する区域である。その上方の土層は前区に準ずる様相である。

地山の砂礫土の面には集石部分が多くあり、石組みとみられるものや、柱穴状ピット、大形円形の掘込みなどがあり、一つの生活面であったと思われる。焼石や作業台石が点々と散在し、11A区では石錘多数が台石群の間にまとまっており、工房跡かと思われる石組みもある。また土器片もこの地山上面の石礫の間や、その直上のやや暗色を帯びた微砂土中に濃密に散在した。

4) 12区以北について

阿井川に沿った一段低い水田区であり、その耕作土直下は11区まで続いた黒色土のレベルより低く、水田造成によって地山砂土の面より下まで削平したものであった。そして遺物・遺構等は認められなかった。

最も川寄りの狭い水田は、さらに2m強の落差で低く旧河川部にあたるもので、遺跡とは認められなかった。

なお現在の阿井川の水位は11区の水田面より約10m低く、大きく浸蝕されて岩盤上を西に流れている。

IV 遺構

検出した遺構は次のようである。

3B~4B区で柱穴16がある。9B~11B区では柱穴23と円形ピット4、集石遺構8があり、8A・8B区では明確でないが石礫の散布部がある。

1. 3B~4B区の柱穴について（表1）

南から突出する丘陵麓の先端部位にあたる位置で、地山の地層上に穿った直径15~43cmの大小の柱穴を認めた。

山寄りの3B・4A区にある柱穴には砂質~砂を含むやや暗色の土が落ち込んでいるが、



図4. 遷移図

表1 3B~4B区ピット一覧表

	直径	底形	落込土	備考	基準レベル (L-170.00)
No. 1	円	22	平	灰褐色	縄文地1片 -58cm
No. 2	やや円	23	平	灰黃褐色	中間に山石 -46
No. 3	円	18	丸やや不整	灰黃褐色(砂質)	-43
No. 4	円	28	平	にぼい黄褐色	-63
No. 5	正円	36	やや丸	底灰黃褐色 上方にぼい黄褐色	建物プラン -90
No. 6	正円	33	やや尖り気味	(?灰黃褐色)	純文片1落込 建物プラン -112
No. 7	円	23	半一部尖り	灰黃褐色・埋土ブロック入	抜掘状8cm 尖先-60
No. 8	円	41	やや丸	暗褐色	-38
No. 9	円	20	半やや不整	灰黃褐色	抜掘状14cm -80
No. 10	長方形	20×30	斜平やや不整	灰黃褐色(砂質)	-62
No. 11	やや円	27	やや丸	黒褐色	抜掘状19cm -65
No. 12	円	23	やや平	暗褐色ブロック入	-75
No. 13	正円	18	平	褐・暗やや明ブロック入	-63
No. 14	円	34	丸	黒褐色	底ブロック入・山石?落込 -106
No. 15	円	43	丸	黒褐色	抜根部暗褐色20cm 土器片落込 -102
No. 16	正円	15	やや平	褐・底やや明色	ブロック入 -64

4B区のものは明褐色の落込み土である。これが当時の地表土を示すものとすれば、現表面よりさほど高くない面から掘り込まれたことになり、伴う遺物は見当らないが、新段階の須恵器片が細床層から数点出土していることを参考とすればそれ以降のものと思われる。P6・P15の柱穴には落込み土中に縄文地の土器細片があったが、これは旧表土中に混在したもので柱穴造構に伴うものではなかった。

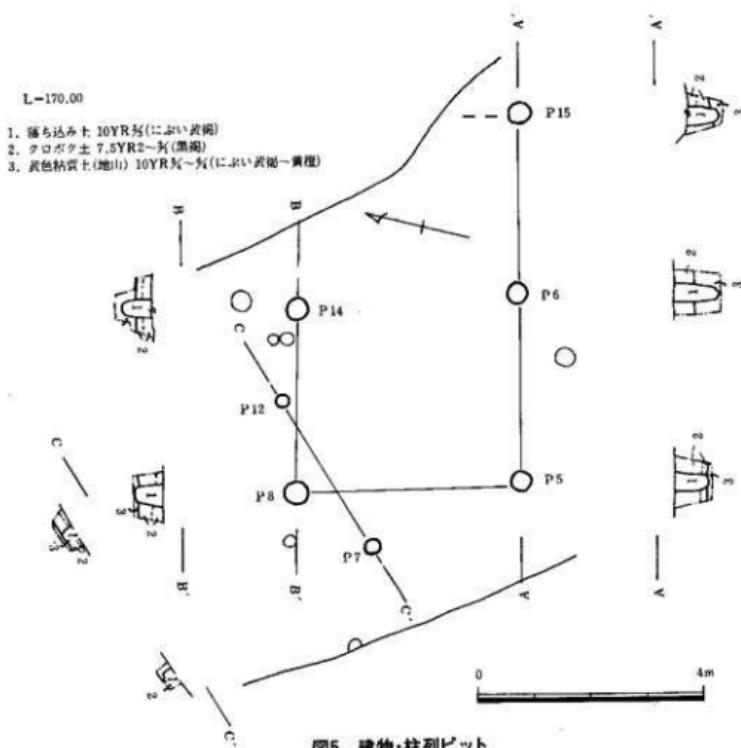
なお、このほか規範地面からの杭穴は多数あったが、いずれも耕土が落込んでいたので調査対象としなかった。

1) 建物

建物プランの判明するものは最も大形で深い柱穴を結ぶ1棟のみで、1間×2間?のはば東西方向のプランである(図5)。柱穴はP15・P6・P5・P8・P14で、調査区外にもう1つあると思われる。

この建物プランは桁行方向磁石でN85°Eであり、柱間3.28m(10尺)で2間とみられ、梁行3.94m(12尺)の1間である。これらの柱穴は、いずれも直徑30cm以上で、柱穴底はやや丸味をもち深さは最も深いレベルであり、他の柱穴ピットと比較して明らかにしっかりしたピットである。

伴う遺物はなく時代は不明であるが、曲尺定寸のプランであることと中世三沢氏の城下



で主要街道の位置にもあたることから、その頃かとも思われる。

2) 柱 列

P7・P12は直線をなす柱列の一部と思われる円形の掘り方で、直径23cmを測り深さはやや浅い。抜根後に流入したとみられる土によって柱径は約10cm前後と推定される。柱間距離は正確に3.00mである。この柱列の性格は不明であるが、一部上記建物と重複するプランであり、落込み土からみるとこの柱列が後のものと判断される。

2. 10A～11B区の柱穴群

この区内では地山である黄白色微砂土に達する柱穴状ピットが多数検出された。地山より上層の黒色土層中から掘り込まれたものであろうが、その面は把握できなかった。また砂土のため掘り方の縁が崩れて明確でないものが多い。配列プランについてはいま一つ明解さを欠くが、三つの円弧が判読されるが、いずれも完結しない。

1) 柱列プラン1

10B区から11B区へ続くものとみられ、規模が大きい。

10B区のP20・P3・P23・P8へ、そして未調査部分に2穴を推定すれば11B区P22・P16'・P14'と柱間距離1.8m~2.2mの間隔で、ほぼ円形に続くものである。プランは直径約10.4mの円形に配列する。ピット底のレベル差は22cmの範囲であり、P14'は割石を詰めて柱根を保証したものであった。

この円形プラン内には、北寄り部分に台石・石皿等を含む広い配石とみられる集石部(石組4)があり、他の部分は石礫が極めて少なく、人為的に排除したかのような空間部分で作業台石が点在する。そしてこの範囲に晚期初頭の土器がやや密に散布するところもある。またこの柱列南外側に沿って中小の礫がところどころに高まりながら帶状に集積されている。柱列内側から排除したものの集積とみることもできよう。

柱根の深さは、上記のように掘り込みの面が黒色土中のため明確でないが、石礫等の出土レベルと大差がないものとすると約40~60cmと推察される。

これが建物であるとすれば、直径10mを超すプランであり、近隣地域に例のない規模となる。主柱が見当らないことから建物ではないとすれば、高い垣とも考えることができよう。そして内側には専ら石器工作の遺構と付随する作業庭面とみられる空間があることになる。

2) 柱列プラン2

11A区に東西方向に並ぶP24・P10・P11・P13'の4個の柱穴状ピットで、直径約4mの円弧をなすもの。柱間距離は1.1~1.2mである。東へ続く部分は調査区外となるが、西へは石組4の内に相当するとみられる。しかし、この石組み中には見当らないことから、石組み以前のプランであるとも思われる。

ピット径はやや小さく23~32cmで、底のレベル差は約20cmである。このピットのうちP13'は土壤とみられるP13の内に所在する。

これらの柱穴状ピットも黒色土中から掘り込まれたものであるが、プラン1と同様にその面は把握できなかった。プラン1に先行する居住建物の一部であろう。

3) 柱列プラン3

10A~10B区の東端部分でP6・P5・P7の3穴が並び、調査区外へと続くものとみられる。柱間距離1.0m及び1.1mでピット径25~28cm、底のレベル差は15cmである。プランは直径4m位の円形と思われ、居住建物が想像される。

この柱穴はプラン1に伴うとみられる石礫集積の下に埋没していたことから、それらに先行する時期と考えられる。

3. 9B～11B区の集石遺構

この調査区内には、人頭大から拳大程度の石礫を人為的に集積したとみられる礫群が5か所以上あり、また平滑な面のある扁平又は台形の川石が点在する。これらのうち10A区を中心にして盛り上げたものが東西に連続するもの（石組3）、強く火熱を受けた焼石の集積部（石組1・2）、11A区から11B区へかけて作業台とみられる平石を置いた細～小礫が濃密な散布部（石組4）が特に顯著である。

11区北端の人頭大以上の川石を積み上げたもの（石組5としたもの）とまとめて置いたもの（石組6）はその下に大形ピットが存在した。

1) 石組1 (10A区) (図6)

柱穴プラン1の南側約4mの石礫集積帯の南縁にあり、15×18cmの平らな川石を中心に10～15cmほどのやや扁平な石でとりまくように配置している。中心の平石をはじめこれらが多く、火熱を受けて赤橙色に変色し脆くなっているものや折損片もある。

これらの石の下には木炭片や何ら掘込み等ではなく、黒色微砂土が厚さ10cmあり、下の礫まじり粗砂の基層へと続いている。これは周辺部の土層と同様の層序であることから、單に焼石の配石であるといえよう。配石の入為性は明瞭であり、二次的に投棄したものではない。配石の間や下面に木炭片等が全く検出されないことから単なる焚火の炉ではなく、どこかで焼いた石を運んで配石したとしか考えられない。用途も炊事用であるのか否かも判断しかねるものである。

2) 石組2 (10A区) (図7)

上記同様集積帯の北縁部で、列をなす礫集積マウンドの一つである。

13個の焼石が平面を上に粗雑に敷き並べたように4個の配石とその周辺にまとめである。そのうちの2個は上面の平坦な面が明らかに磨耗した石皿であり、焼けて割れたものもある。また敲打と磨面のある卵形の磨石も南縁に用いられている。

これらの石は並べられたもので、重なりはなく、石の下には掘り込み等の何もない。厚さ12cmの黒色砂

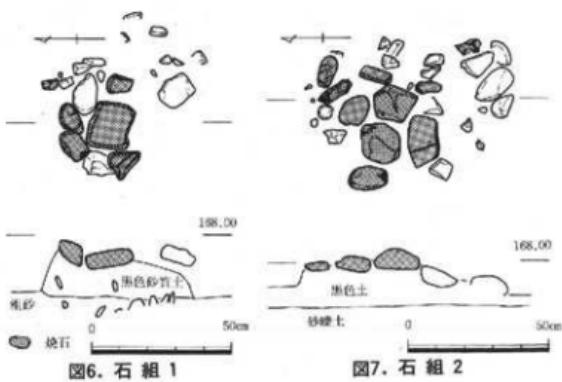


図6. 石組1

図7. 石組2

質土を経て地山の砂礫層に至る。石の間隙や下などに木炭片等は水洗でも検出できなかった。従ってこの焼石は他處にて焼かれたもの、または焼けた石をここに移して敷き並べたものとみられる。このことは上記の集石1と同様である。

3) 石組3 (10A・B区)

上記石組2から東へ連続する集石部であるが、この集石部は中～細礫をやや積み上げたようなもので、小さな焼石2個が認められるほかは自然の川礫を100個以上かき集めたものであった。この集石の下は上記同様何らの加工面もなく、黒色砂質土の上に積み上げた集石部である。

この石組3と前記石組2との中间にも同様の集石が認められるが、これらは一連の帶状をなす集石帯として把握される。

4) 石組4 (11A・B区) (図8)

川石の平坦な敲打や磨面を上に4個の台石が並び、約50cm離れてさらに2個の台石が置かれ、さらに30cm離れて山石の割石が1個置いてある。それらの台石の間には拳大の川石に混って、磨石・石皿片等が散布し焼石も混入している。特に台石の並ぶところには、打欠き製石錘10個が未製品や破損品とともにまとまって出土した。

この2.5×3.0mの区域内には、石錘のほか安山岩や黒曜石の剥片がやや密に散布することから石器の製作加工を行った工房と思われる。

30～40cmの台石の面がやや高く、中～小の石礫はそのベース面に散在するが、ベース面下には何らの加工も施されていない、厚さ約10cmほどの黒色砂質土上を平坦にして配石されたもので、やや扁平な拳大の石には磨耗による窪みが認められるものもある。

5) 石組5 (11B区)

断面調査の結果、石の詰まった直径1.2mの大形ピット(P27)の上部であることが判ったので別項に記述する。

6) 石組6 (11B区)

掘り込みの上部におかれた集石であった。大形ピット(P17)の項において記述する。



図8. 石組4

7) 石組7 (8A区) (図9)

上面が平坦な35×30cm～25×15cm程度の川石（花崗岩）の台石7個が配置しており、その付近には多数の打欠き製石錐が散布していた。

上面に磨耗の認められる台石は、地山暗色砂土の上5～10cmの黒色土層下位に据えてあり、石錐は中～小の礫とともにこの台石の中～上面あたりから出土した。焼け石片も混じ

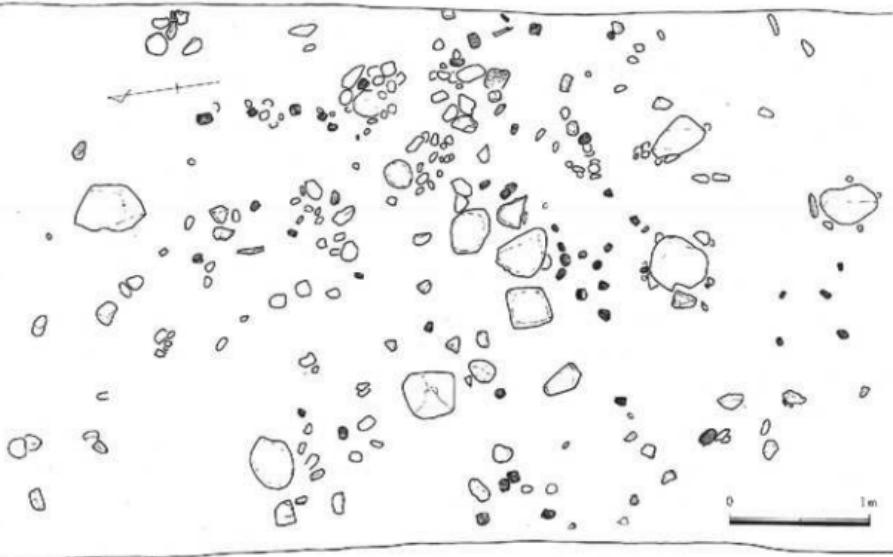


図9. 石組7

● 石錐

るなど上記した石組4と同様のもので、石器（石錐）の工房と思われる。

なお、約6m北には石礫とともに長さ20～8cmの楕棒状の自然石が8個あったが、使用痕は明瞭ではなかった。しかし、この配石構と何らかの関連を思わせるものである。

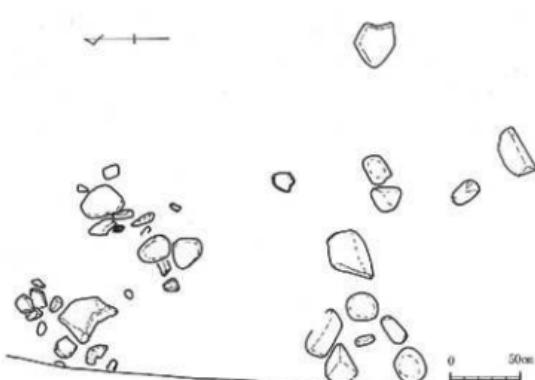


図10. 石組8

8) 石組 8 (9B区) (図10)

2群8個の頂部が平坦で磨痕のある台石が配石され、一部発掘区外へと続いている。石鍤や剝片等の集中は顯著ではなかったが、やはり石器工房の一つであろうか。

4. 大形ピット

P17 (石組6に同じ)：上面に35×25cm～12×25cmの川石や磨面とみられる平滑面のある石などがやや集めたように置かれていて、「石組6」としたものであるが、この集石部の地山面には円形の大きいピットが掘り込まれておりP17とした。(図12)

ピットは上端が85×90cmのほとんど円形で、深さは上部の集石底面から48cmの楕円形をなす掘り方である。ピット内には上部と同じ黒褐色土が落ち込んでおり、ピット内面に沿うようにやや扁平気味35～25cmの川石や小石合計12個(花崗岩)が、雪崩れるように落ち込んでいた。壁面に接した石が、水平又は中央寄りに高く置かれていたものとすると、もとはピット内にはすくなくとも厚さ35～50cmほどの埋納物があり、その上に扁平な重石を敷き並べていたものと推定される。そして埋納内容物の自然消滅によってピット中央部が陥没し、地表土がその上に流入堆積したものとみられる。

しかし、ピット底には埋納物を示す何らの遺物も検出されなかつたが、床面近い土中粗製土器の細片3と木炭の微細片5を探取した。また流入した土中からは、太い縄文地や撚糸文地の土器片をはじめ、粗製土器片や黒曜石の剝片等約20片が混入していた。そのうち最も新しい遺物は晩期凸帯文の黒土BⅡ様式の土器片が1個あった。これがこのピットの時期を示すものと考える。

なお、化学分析の結果はピット縁辺の土に比較して、ピット内流入土や床面土には本質的な差異は認められなかつたとされた。

以上の状況から穀実等の貯蔵穴と考えるのが至当かと思う。

P27 (石組5に同じ)：川原石(花崗岩)がいっぱい詰め込まれた大形のピットである。

地山砂土の上の黒色砂質土15cmあたりから掘り込まれているようであるが明確ではない。ピット

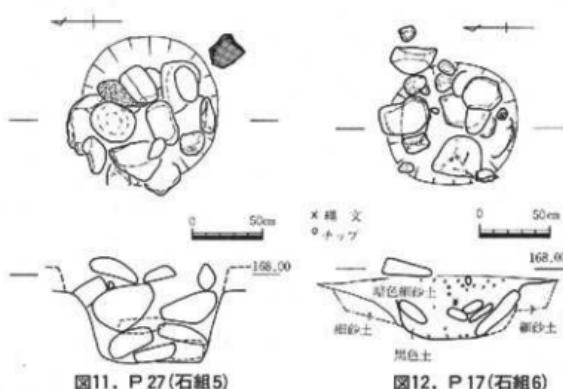


図11. P27(石組5)

図12. P17(石組6)

は砂上の地山面の上端で100×105cm、底面は平らで70×70cm、深さ60cmの円形の堀り方である。40×30cm～30×20cmのかなり重い川石（花崗岩）17個が詰め込んであり、最上面には小形で扁平な焼石3個もあった。これらの石はピットのやや西寄り気味に片寄って集積し、東側ピット上端部には石の堆積はなかった。また石はほぼ水平で安定的に置いてあり、傾斜して雪崩れたものとはみられず、当初の様相のままであると思われた。

(図11)

このピットの様相は、上記したP17に類似するものであるが、ピット内の石が雪崩れ状でないことは相異する。ピット内の貯蔵物を取り出したのち重石を穴の中に納めたものと解釈することもできよう。

なお、石の間で採取したピット内埋土やピット底面の上についてピット外周の土と比較した化学分析結果では、本質的な相異点は認められなかつた。

ピット内の土には土器細片や黒曜石の剝片がかなり多く混入しており、最も多く、最も時代の下るものは無文の粗製土器片で、17点を数えた。これによると、ピットの時期は大まかに縄文晩期と考えられる。

P13：砂上の地山に113×95cm、やや椭円形で底のやや平らな、深さ40cmほどに掘り込まれたピットである。尤も本来の掘り込み面はさらには約15cm上方の黒色土中の面かと思われる。ピット上面には標石等はない。

ピット内には、中心部で厚さ15cmほどの黒褐色砂質土が土器片等を含んでおり、その上に黒色土が落ち込んでいた。底面中央には直径12cm、深さ6cmの小柱穴状の落ち込みが1穴ある。黒褐色砂質土に含まれていた遺物は、木炭片5や土器片17等で、そのうち粗製土器片8、黒色磨研土器片1があり、床面近くには黒曜石の剝片とともに安山岩製の鎌があった。この鎌は扶りのない極く粗製品である。

ピット内落ち込み土及び底面土について化学分析の結果は、周辺土に比べてリンの富化が認められ、埋葬等の可能性を指摘された。

ピットの形状や埋土の状況も、昭和55年度の第一次調査において、G9区トレーンチ内で検出した土壤に極く近似するもので、墓壙と考える。また、このピットの時期については、ピット底面に近い位置の出土遺物中最も多いのが粗製無文土器片であり、黒色磨研土器片と安山岩の粗製三角鎌もほぼ同時期のものとみられることから、これらを日安に晩期初頭頃と考える。

なお、底部中央の小柱穴状落ち込みは、堆積土層からしてそれ以前の柱穴の底部と思われる。

P16：地山に105×82cm、やや長円形で、狭い平らな底面の深さ37cmのピットである。ピッ

トの南側縁辺上には、 $20 \times 30\text{cm}$ 、 $17 \times 20\text{cm}$ 、及び 18cm ほどの川石がある。この石の底面は、ピットを認めた地山砂上の上 17cm の黒色土中にあり、ピットの掘り込まれたベースは、この黒色土中の面からであったと思われるが、黒色土中の黒色土の落ち込みは、その面では判別できなかった。従って本来深さ 54cm ほどはあったものと思われる。

ピット内は厚さ約 20cm の黒褐色土（黄色砂質上のブロック入）で埋められており、中央の底には黒色土が落ち込んでいた。ブロック入黒褐色土には土器片等を含んでおり、床面近くには黒色磨研上器片2や、粗製無文片1、安山岩製錐の折片等があった。ピット底面には直径 8cm 、深さ 5cm ほどの小柱穴状落ち込みがあったが、より以前の別のものでたまたま重複したものと判断した。

ピット底面の土について化学分析の結果は、周辺の土に比べてリンの富化が認められ、上記P13と同様に埋葬が指摘された。このピットもP13とほぼ同様であり、晩期初頭頃の墓壙と考える。

P14：石錘などを製作した場所と考えられる集石遺構の北端部にある。

地山面に深さ 15cm 掘り込んだ直径 60cm ほどの円形皿状のピットである。底面には幅 $15\sim 20\text{cm}$ 、長さ 40cm の皿状に剝離した焼石が敷いたように置かれている。ピット縁辺部にも焼石3個と打欠製石錘1個があった。

ピット内に落ち込んでいた黒色土中から粗製無文土器2片を採取したが、木炭片等は見当らなかった。またピット内面が火熱を受けた状態でもなく、むしろ砂礫質の地山に浅く掘り込んだ柱穴の根固め石として、付近の焼行を用いたものとも思われることから、柱穴の一つとみられる。

V 遺 物

出土した遺物は次のように夥しい数の細片となった縄文土器と石錘等の石器である。

A. 遺物の分布

約10,000点を数える出土遺物のほとんどは縄文時代遺物であり、数点の土師器・須恵器等は黒色土層の上に位置する褐色土層から出土しており、縄文時代遺物は黒色土層の上として中位以下から出土した。

このように縄文時代遺物は明確に黒色土中層以下であり、暗褐色の間層があって、その上の褐色土層は須恵器以降の歴史時代となっている。

サンプリングした遺物の様式別出土位置とレベルを分布図に示すと、次のようである。

1. 縄文前期土器の分布（図13）

検出した土器型式は、里木I・磯ノ森系で次に羽島下層である。九州の轟・曾畠系が数点検出されたことは注目される。

8A区から川に向かって調査区北端の11B区まで全域に認められるが、8A～9A区と11A・B区にやや密に分布する。前者は暗色砂質土層の上面に、後者はその上約10～15cmの黒色土層下位に多い。

しかし、出土レベルにも高低差が著しく、ある程度の擾乱を受けたものとみられ、面としての検出はできなかった。

2. 縄文中期の土器分布（図13）

土器型式では下鶴倉遺跡発見の端緒となった船元IIが主であり、里木II系も出土している。前者は10B区の石礫集積部あたりに密であり、後者は9A区の暗色砂質土層の上面あたりに多く認められ、里木I式系と混在するように包含されていた。

3. 縄文後期の土器分布（図14）

後期前半期の型式は極く少なく、ほとんどが後半期の彦崎KII式系である。中津式系や福田KII式系は黒色土層中位あたりにまれに包含したが、彦崎KII式系は11A・B区に濃密であり、比較的集石遺構や10B区では石礫集積部の頂部レベルに集中する傾向が認められた。

また、黒色土層が厚く堆積を始める6Bから8A区までの地山面が最も深い区間では、厚い黒色土層のほぼ全層に包含していて、面としての出土ではなかった。

4. 縄文晚期初頭土器の分布（図14）

後期末～晚期初頭とされる磨研土器や半精製土器が多い。

これらは9A～11B区において密であり、出土レベルは上下約40cmとかなり幅があるが、概ね集石遺構や石礫群と同じパターンの分布を示す。

また、岩田IV類系の大破片は、6B～7A区の黒色土層中位にあり、転落流入したものとみられる。

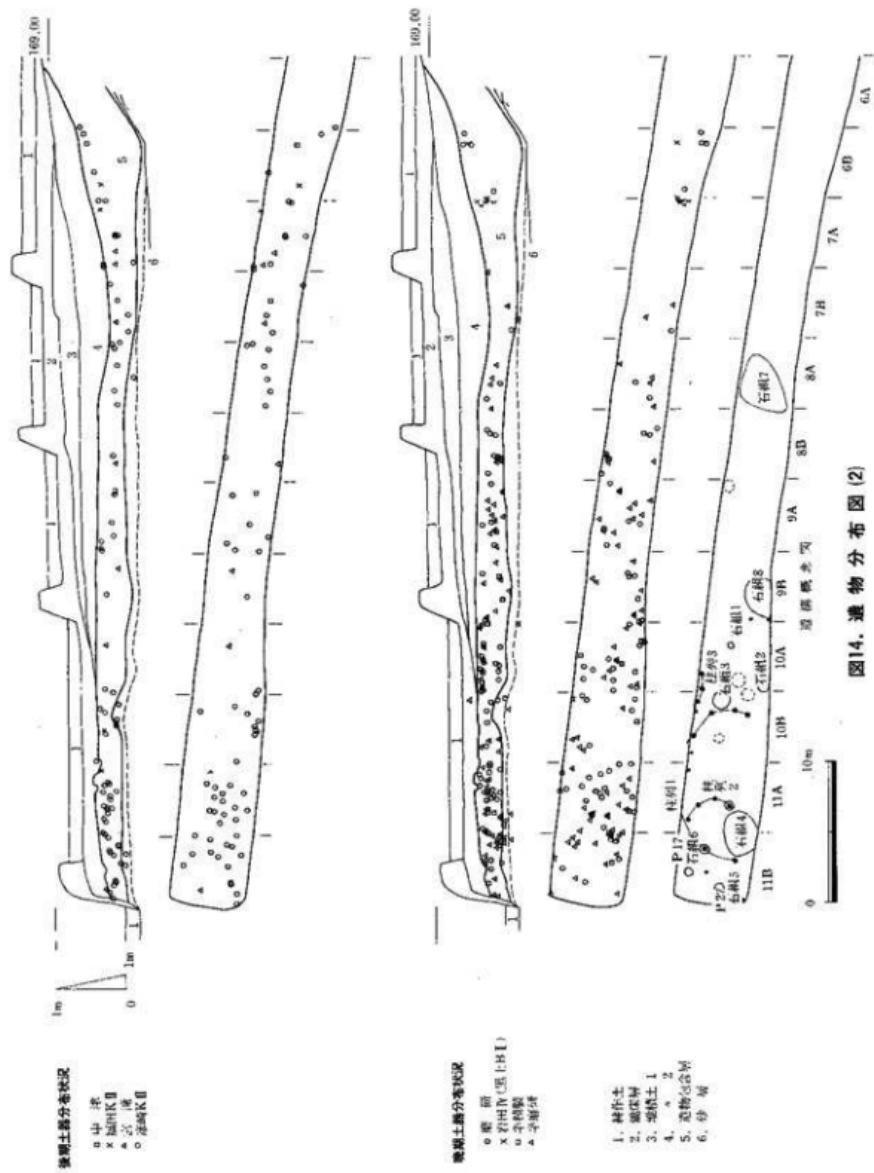
5. 縄文粗製土器の分布（図15）

後・晚期粗製土器片は、出土総数の約半分を占め多量である。分布は6A区から調査区北端の11Bに至る全区に及ぶが、特に10A区・11A～B区を中心には濃密である。また、若



圖13. 滲物分布圖(1)

圖14. 遺物分布圖(2)



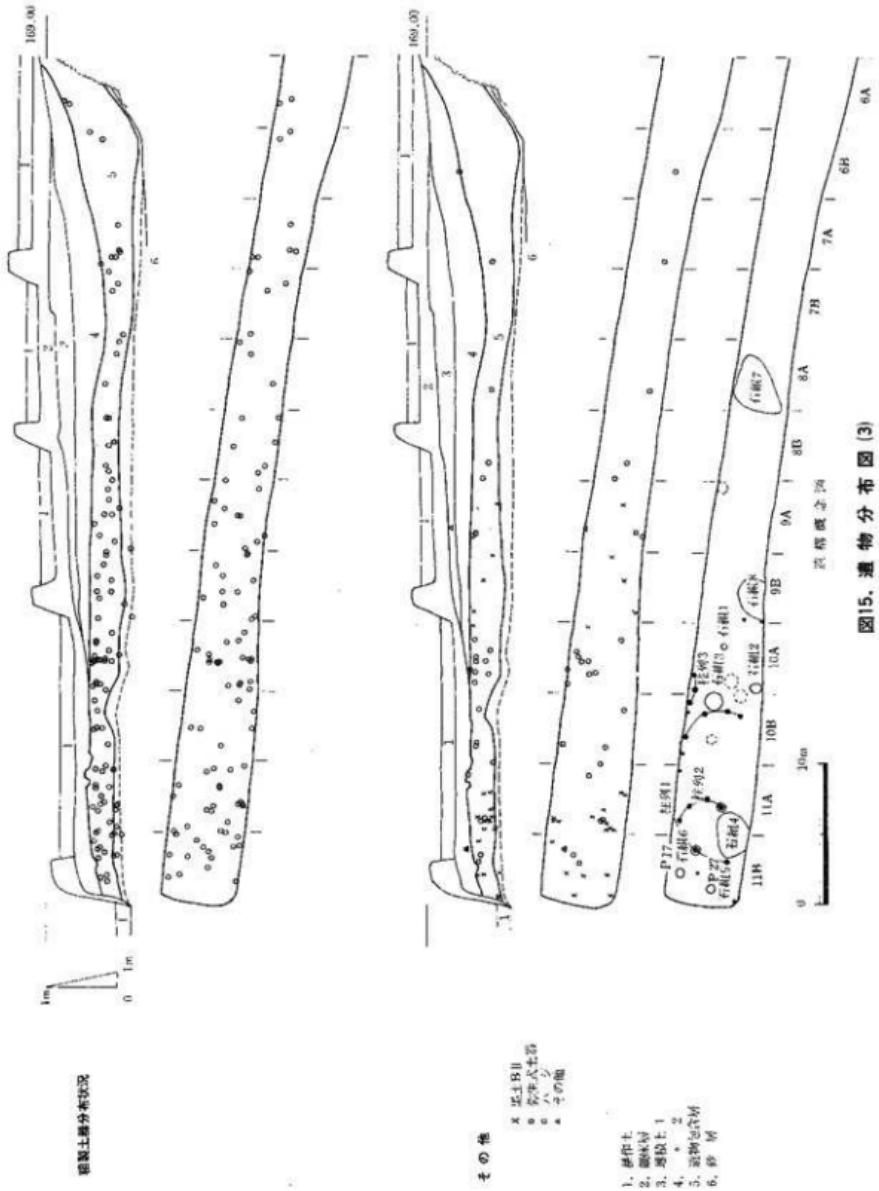


圖15. 遺物分佈圖(3)



平量である6A・B区のものは土層位も高く、転落流入したものとみられる。

この粗製土器の分布状況は、上記した磨研～半磨研土器のそれとほとんど同様の分布を示し、共伴と思われるものであり、集石・石礫遺構に関与するものとみられる。

6. 縄文晩期末以降の土器の分布（図15）

黒土BⅡ式系は出土した数は少ないが、11A～B区にまとまりがある。柱穴列プラン2、又は石組4に伴うものであろうか。

弥生中～後期の土器も少量の出土であるが、10A区東寄りの黒色土層上～中位にまとまりが認められる。

数点検出した須恵器と近世磁器片は、いずれも耕作土（耕床）下面であり、水田造成に伴って混入したものとみられる。

7. 石錘の分布（図16）

7B区から北へ全域にわたって分布しているが、特に11B区の工房跡とみられる石組4と8A区石組8では台石の狭間でまとまって検出された。いずれも中型の打矢き製であり、出土レベルは黒色土層下位で、地山暗色砂土に至る約15～20cmの間である。

8. チップ（剝片）の出土分布（図16）

石材は主に黒曜石と安山岩で、検出総数約700点のうち前者が64%を占めていた。分布は8A区から北であるが、黒曜石・安山岩とともに11A・B区が特に多く、次いで9A区である。安山岩は黒色土の上位から下面まではほぼ全層にわたって分布するが、特に11A・B区の黒曜石は石組4付近に集中する状態であった。

このほか、碧玉・メノウ・石英なども各1～3点黒色土層下位から出土した。これらの半数は11A・B区である。

B. 土 器

1. 縄文前期の土器（図17-1・2）

1～15はすべて細片で器形等は判らないが、大形の連続爪形文を施す。口縁部や底部については不明である。器壁の厚さは4mm前後で、内面は一枚貝による横条痕、又は粗く横なで状をなす。胎土に砂粒を含み、概ね黄棕～黄褐色で焼成は良い。これらは羽島下層式系の土器である。

16～38は平行線間にC字形に爪形文を施す一群である。ところどころで波状となる口縁

で集束する爪形文帯は口縁下部を巡り、胴部を巡る爪形文帯との間は緩い曲線又は菱形をなす爪形文で連絡している。胴部施文帯から下方は撚りの強い細粒のR繩文地となるが、上半身施文部はなでた無地である。器形の復元は困難だが、器壁は3~4mm程度の薄作りで、細砂のある胎土、焼成の良い褐~黒褐色の土器である。口縁はほぼ直立し、口縁端に細かく浅い刻目のあるもの²³もあるが、端部を平らになでたもの（16・17・31）もある。内面には輪積みらしい痕跡が認められ、比較的入念になでている。また内面に著しく炭化物の付着したもの²³もある。16~20は同一個体である。27はL繩文地の削片であるが、やはりこの一群のものであろう。この一群は磯ノ森式系に比定される。

40~42は、厚さ4~5mmのやや薄手の口縁部で、口縁直下の外側に円形⁴⁰、又は四角形（41・42）の強い刺突文を巡らせるもので、地文はなくなっている。刺突は特に強く、そのため器壁内面側が凸起変形する。口縁端は平らになでたもの（40・41）と丸くおさめたもの⁴²がある。胎土には微砂を含み、焼成は良く、橙~灰褐色である。棒状工具の刺突を特徴とする彦崎乙式系の土器である。39は口縁の細片であるが、口縁端に深い刻目と口縁外直下に横行する爪形文帯がある。明瞭ではないが地文はやや粗い繩文がほぼ縦に付くものようである。器壁は厚さ5mmでやや薄手の造り、胎土には細砂を含み、焼成良く、にぶい赤褐色を呈している。或は船元丁式系であろうか。

43~58・60・64は、内窓した頸部から折れて外曲しながら口縁の立ち上がる姿であるが、胴部以下については明確でない。口縁部（43・45~47・60・64）内側に折返し状に肥厚して繩文帯とし、外側は突帯を巡らせ、その上に半截竹管又は先端がL字形の工具による爪形文を施し、地文は全面が單方向に斜行するやや細かい粒の繩文地である。爪形文の突帯は口縁下のほか頸部に2条（44・48）胴部に1条（50・53）巡り、それぞれの間を擬走・弧状・逆く字状などの爪形突帯文で結ぶ文様構成である。口縁が隆起~波状をなすもの⁴⁵もあり、口縁上端は幅広く平坦とし、先端L字施工工具で表側と内面側からそれぞれ細かく刻目を施している。胎土には微砂を含み、焼成良く、褐~暗褐色の堅い土器で、彦崎乙II系の一群である。これはかって第一次調査において里木丁式系としたものと同じである。

59~66は口縁内側に繩文帯を付けるものであり、そのうち60~64は上記のように口縁端に内外両側から細かく刻目を施しているが、61・62はヘラ状工具かと思われるもので粗く深い刻目としたものである。59・63は外側にも貼付帯を設けたもので、口縁端を半截竹管具で内外から強くやや粗く押引きした爪形状刻目⁵⁹、又は繩文⁶³としている。65・66はいずれも隆起する口縁で、内側をわずかに厚くして繩文帯とし、端部は尖り気味に造るものである。59を除いたこれらは、田井式系とみることができる。

68~71には、口縁部直下や胴部に爪形突帯のほかに只般による扁状文が認められるもの

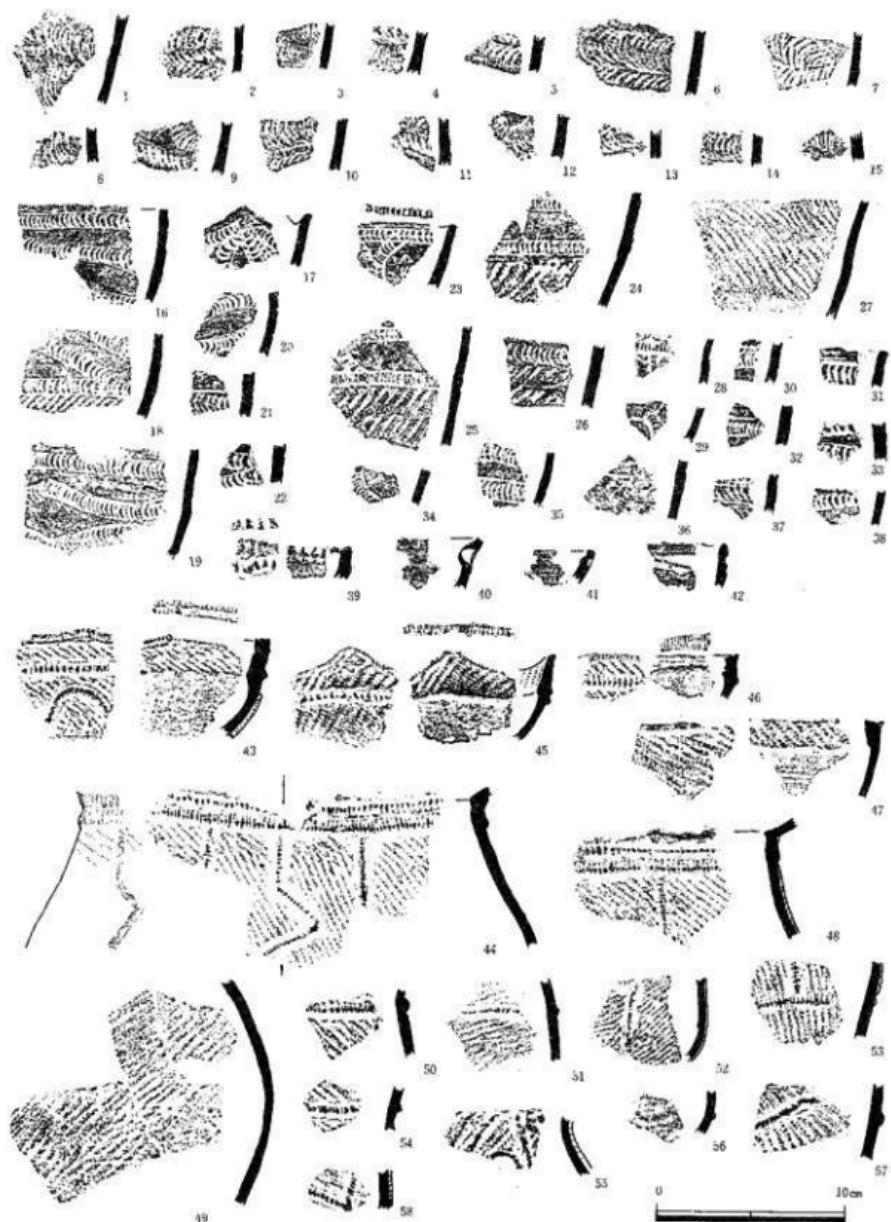


图17-1. 土器 I-1

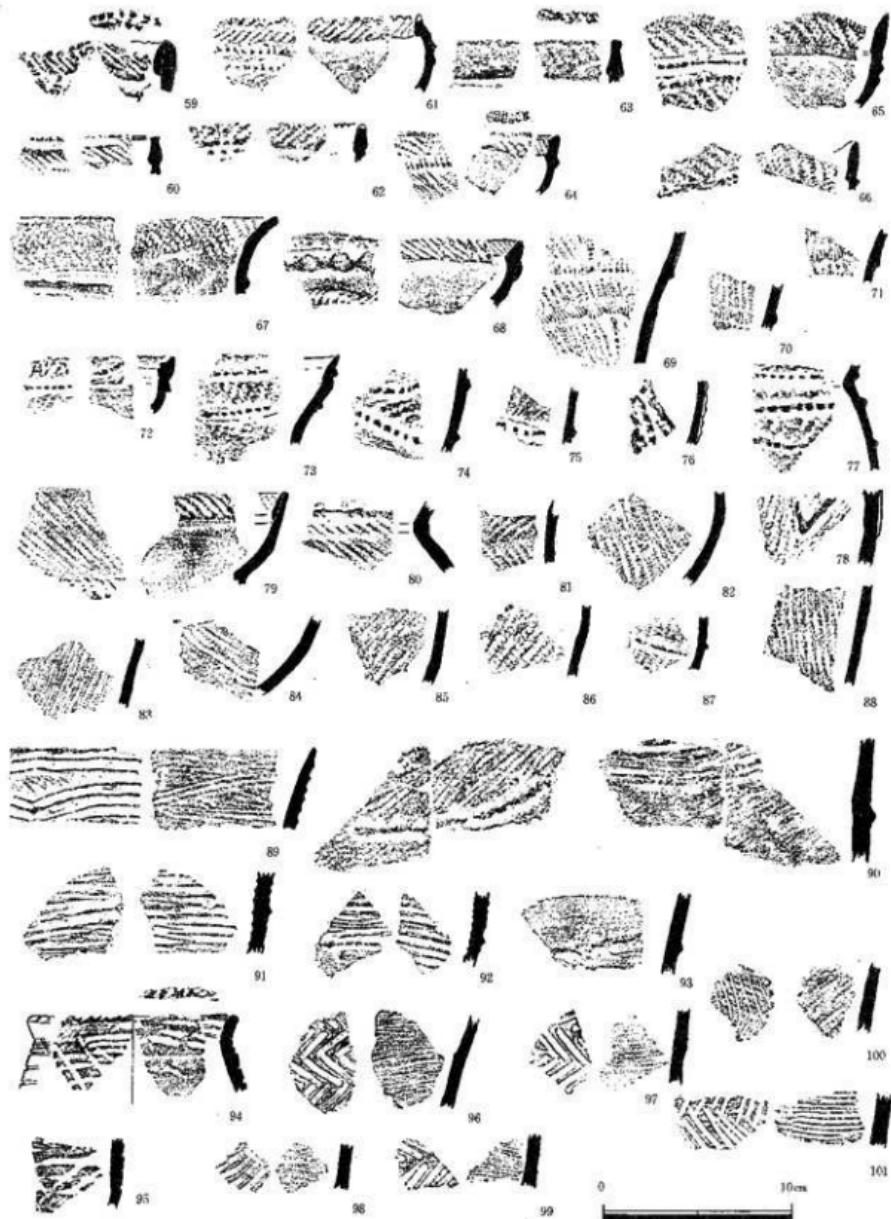


図17-2. 土 器 I-2

で、大歳山式系であろう。67は外反する口縁で頭部に半截竹箒による突帯と細かい平行沈線がある。例の稀なものである。

72~78は文様構成等についてみると、山井式系或は彦崎乙Ⅱ系とみられるが、特殊突帯の爪形が粗く施文原体に大きな差異があり、地文の繩文が粗大化している点で異なり、59もこれに類するもので、これらは船元Ⅱ式への中間的な形態とみることができよう。

79~88は厚さ5mm程度で、繩文地のみまたはそれを主とする破片である。79・80はキャリバー形の口縁～頭部で、やや粒の粗い繩文地の土器で、口縁内面に折返し肥厚の繩文帶が付く。内面はヨコなでである。

82~85はやや細粒のR又はL繩文地片であり、88はこれがほぼ縦に走るもの、87は特徴ある凸帯文がある。これらは凡そ彦崎乙Ⅱ式～田井式系のものと思われる。

81はやや細粒の羽状繩文片で、碳ノ森式系であろうか。

86は地文の繩文がやや粒の粗いものであることから、後出する船元Ⅰ式系と思われる。

89はやや外反する口縁部で器壁は厚さ6mmである。胎土には細かい石英や角閃石を含む。焼成は良く、内面は橙色、外面はにぶい褐色を呈す。器表はやや右下りの貝殻条痕の地に口縁直下から細い粘土紐の貼付による細隆線文が、5~7mm間隔で横に走り、中途に菱形を引いて整形している。内面は貝殻条痕が残る。

91・92は同一個体片で、厚さ7mm、貼付けでなでた細い隆線が横走するもので、内外面ともに貝殻条痕が顯著である。胎土には微細な石英質砂粒がみられ、焼成良く、内外面とも灰黄褐色である。

90・93は同一個体片で、厚さ6~8mm、胎土には石英砂粒を多く含み、内外面とも貝殻条痕であり、緩やかな曲線の貼付細隆線文が付くもの。焼成はやや良く、内外面ともにぶい黄褐色である。

このように89~93は、貝殻条痕地にミミズばれ状の細隆線を貼り付けるのを特徴とし、九州に広く分布する轟式系の土器で、90・93はB類、89・91・92はC類に附するものとみられる。

94・95は同一個体のII縁部と胴部片で、滑石を多く含み脂質感の強いものである。胎土には滑石のはかに石英質の砂と、わずかに角閃石とみられる結晶を含む。II縁は短く外反するもので、器壁は厚さ5~6mmである。文様は幅3mmほどの強く底の丸い沈線で描かれたもので、頭部から胴部へかけて横線を断続的に引き、これに交叉する右下りや左下りの斜線を引くことにより斜格子状の文様としている。II縁内面には横に同様の短線を断続させながら3列引いている。II縁上面は丸く收めて斜めに粗いヘラ状刻目を刻む。内面の調整は入念で平滑である。

96~99・101は厚さ6mm内外の破片で、縞杉文を重ねた施文のものである。施文は幅3mmで浅く底のやや平坦な沈線で縞杉の文様を一本宛描いたものである。100は細線によるものである。胎土には滑石は用いていないが、細かい石英質砂粒と若干の角閃石片がみられるもので、焼成良く、器表はにぶい赤褐色～灰褐色である。これら96~101は、滑石入り・縞杉文とともに九州に普遍的な曾畠式系の土器である。

2. 縄文中期の土器 (図18-1・2)

厚手で太い縒文地のものと撫糸文地の土器群である。

1・2は同一個体、撫りの弱い長目の粒のR縒文地のやや粗面のもの。厚さ7mmで、口縁端は外反りに丸く收め、内面はヨコなでである。器表は口縁端から12mm下って幅12mmの太く大きい爪形文をC字に連ねて巡り、さらに下方にも同様の爪形文帯を2条以上平行させる。口縁端内側にも同様に爪形文を巡らせる。器壁には補修と思われる二次穿孔がある。3も爪形文の破片で同種のものである。これらは船元II式A類に準ずるものであろうか。

4は厚さ8mmで、内外面全面にやや細目のL縒文を施した外反りの口縁部である。口縁外面とこどろくで頂部が口縁に達する波状の粘土を薄く貼り付けて施文帯としたもので、ここになかば刺突気味に押引きした爪形及至は短線状の刻みを連ねる。口縁上端も刻目としている。

5・7は同一個体である。緩やかな波状口縁で、わずかに外反する大形品。器壁は9mmと厚く、内面はヨコなで、外面は口縁端付近に太くゆるいL縒文がみられ、濃密に爪形文が縦・斜に施されている。爪形文は幅1.5cmの施工具による大きいもので、口縁の波頭部へ垂直に下から上端へ1条、この縦施文帯から両側へ、上方や下方斜めに多数の同様な爪形文帯を刻む。特に中心の縦列は強く押し引きしたため中央が盛り上がって低凸帯状をなしている。口縁端部付近は地文の縒文地のままである。口縁端内側には上端にかかる爪形を刻む。外面に煤の付着が認められる。なお、9もこれに近いものである。

6は内溝する口縁が緩やかに波うつものとみられる、厚さ8~9mmの大形品の破片である。器表は無文地で、口縁の高まるところに集束する横及び斜方向の低凸带上に、下から上へ或いは左から右へ爪形を押し引きする。口縁上端には刻目、外側にも爪形を刻む。口縁端内側は面取りした面にやや細目のL縒文を施し、以下はなでている。

8は括約する胸部から膨らみながら内溝する縒文地の口縁部で、器形はキャリバー形をなすものであろう。口縁端には短く花弁状の隆起があり、これを基点とする逆V字形の低い貼付凸带上に刻目を施す。この両側にも間を埋めるように斜行する刻目凸帶があるが、パターンははっきりしない。口縁上端は刻目、内面は隆起部のみL縒文を施して下方はな

で仕上げである。器表地文の縦文はL縦文を縦位に施している。器壁の厚さは7mmで、隆起する口縁部分のみ9mmと厚くする。

以上の4～9は当刻遺跡発見以来周知されている様式のもので、船元II式A類の系統に入るるものである。

10～17は縦文地に刻印のない凸帯を線状に貼り付ける一群である。10のII縁部でみると

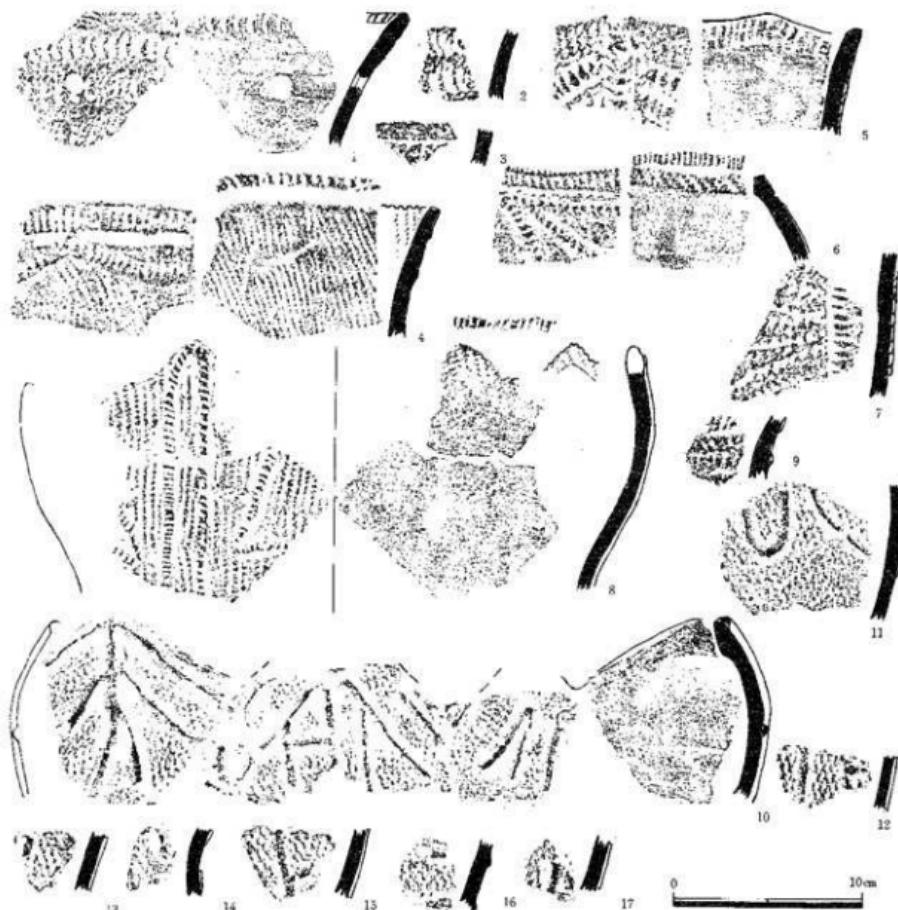


図18-1. 土 器 II-1



図18-2. 土 器 II-2

大きく膨らみながら内湾するキャリバー形の器形で、口縁は山形に起伏する。器壁は8～9mmの厚手で、口縁の隆起した先端のみ内面はなで、表面は撚りのゆるい長大な粒のL繩文地である。施文は粘土紐を貼り付けた凸帯で、その上に刻目等は施さず、指でなでて線をつくる。凸帯による文様は口縁を縁どって起伏する平行線と、頂部から垂下する平行又は中途から分岐する線、そしてところどころで短く横に走る線とで構成している。11もほぼ同様であるが、凸帯がU字状の曲線を描く部分のある別個体片である。12～17は類似する一群の破片であり、10～17の一組は船元Ⅱ式C類に相当する。

18～32は撚糸文の厚手土器片である。口縁部18はゆるく内湾し、口縁端にも撚糸文を施し、口縁に沿って6条の粗い平行沈線を巡らせる。25の胴片には半截竹管による平行線が曲線を描くのがみられる。33を除くこれらすべてについて内面は二枚貝によるヨコの調整がみられる。この一群は撚糸文を特徴とする里木Ⅱ式系の土器である。

33は撚糸文でなく二枚貝かと思われる縦線で里木Ⅱ式系に模してあり、横沈線も断面が丸く、内面も磨かれるなど上記とは異なるもので、里木Ⅲ式系とみられる。

34～39は、ゆるいL繩文を地文とし、半截竹管による平行沈線を付ける一群。34の隆起する口縁端は外に肥厚する。35は内湾する口縁端に刻目を付ける。この一群は船元Ⅲ式B類とみられる。

41・43は半截竹管による粗い縦条線をもつもので、41は隆起する口縁に近い部分であり内面向端に粗くゆるい大粒のL繩文を施す。42とともに器表にはやや凸帯状の粗雑な縦条痕を全面に施している。内面はなで仕上げ。

48・50・55は半截竹管整形の凸帯文を曲線に付ける。口縁内側は段を設けたゆるいL繩文帶を巡らせ、以下はなでている。以上は船元Ⅲ式A類に準ずるものであろう。

46・47は同一個体で、器表に強く深い削りの大形沈線文を縱に並べ、その集結部には長円形の凹部部分を作る。内面はなで。類例のないものである。

51は尖り氣味に隆起する口縁である。無文地に貼付けた凸帯にはヘラによる刻目、口縁上端はヘラで拡張するほど強く押した刻目で、内面にはL繩文を付けている。

52・54は外方へ折り返した口縁と上端にRの撚糸文を施したもの。内外面とも二枚貝による条痕が著しい。57は細く粗い逆線の地文に薄い貼付凸帯に雜な爪形刻目をD字形に付いたもの。58は無文地に大形爪形文を軽く付けたもの。

55は粗く横擦りの器表に幅広で薄い粘土帶を貼り付け、その上にゆるいR繩文を付けたもの。60は厚手の器壁を丸ノミ状工具（半截竹管？）で深く削って太い隆線状とし、その上にL繩文を施すもの。59は内方へ尖らせる口縁部に併行する貼付凸帯と、それに結合して口縁端より高くなる耳状の貼付凸帯を付ける無文土器である。

これらはいずれも明確な類似例が見当らないが、大まかに中期の所産と思われる。

また53はゆるく太いL縄文地に角ばった変形爪形を山形に連続させ、直立して薄くなる口縁内側にも同じ工具による刻目を施すもので、縄文地からすると船元系の土器と思われる。

なお、42・44・45は内外とも二枚貝の条痕で、細い隆線を横とそれを結ぶ縦に付けたものであり、轟式系のものであろうか。

3. 縄文後期の土器（図19）

1・2はやや太めの沈線に区画された磨消縄文で、沈線は曲線的であり、内面はヨコなでしている。厚さ6～7mmの土器で、にぶい褐色を呈し、縄文は細かいRとLで、中津式系の磨消縄文土器である。

3・4は直線的な沈線が直交もしくは縱走する部分とみられる磨消縄文で、福田KⅡ式系のものとみられる。

5～9は無文地に曲線又は直線的な沈線を施すもの。9には消し残った細いL縄文がみられる。7は口縁に平行する3条の沈線がみられ、6は波状の口縁に沿った曲線であり、8はやや肥厚口縁気味のようであるが、細片のため不明確である。いずれも胎土は良質で微砂を含む。概ね黄橙色で、明るい色調の土器片であり、津窯A（彦崎KⅠ）式系のものである。

10は浅鉢形をなすものと思われる精製土器で、器表は内外とも入念にヘラ磨きしたもの。外反する体部から屈折して短く直立する口縁は、外方に小突起してわずかな波状をなし、その頂部に巻貝尾部を用いた丸穴を施す。施文は専らL縁外側に限られ、やや浅い沈線に縁どりされた口唇部と口縁下端部には、二枚貝（サルボウガイ類）押引きによる繊細な爪形状刻目を施す。画線である沈線の始点と終点には押えた串状工具の深い小孔を穿つ。この画線間の無文帯は施文後に磨研し、口縁上端もやや平らに磨研したものである。器壁は厚さ4～6mmで、胎土はち密、焼成良く外面は橙色内面はにぶい褐色である。

11も浅鉢の口縁部で、波状に盛り上げた端部にさらに強く外反する把手状の造り出しをしたものである。施文や器表調整等は上記10とほとんど同様であり、同一個体と紛らうほどである。器壁の厚さは体部が4mm、直立する口縁部では8.5mmで、L縁上端は幅7mmの平坦面としている。舌状把手部の上面には、巻貝のころがしによる擬似縄文がやラフに付き、その上を両端に刺突孔のある浅い線をU字形に描いて花弁状になかを凹ませ、下面はヘラで磨いている。器底底面の突出部には、指あたりに恰好な窪みを削り出し、その中に2個の刺突孔を穿っている。なお、口縁部上端と下端の施文帯に施した刻目文は、ヘラ状

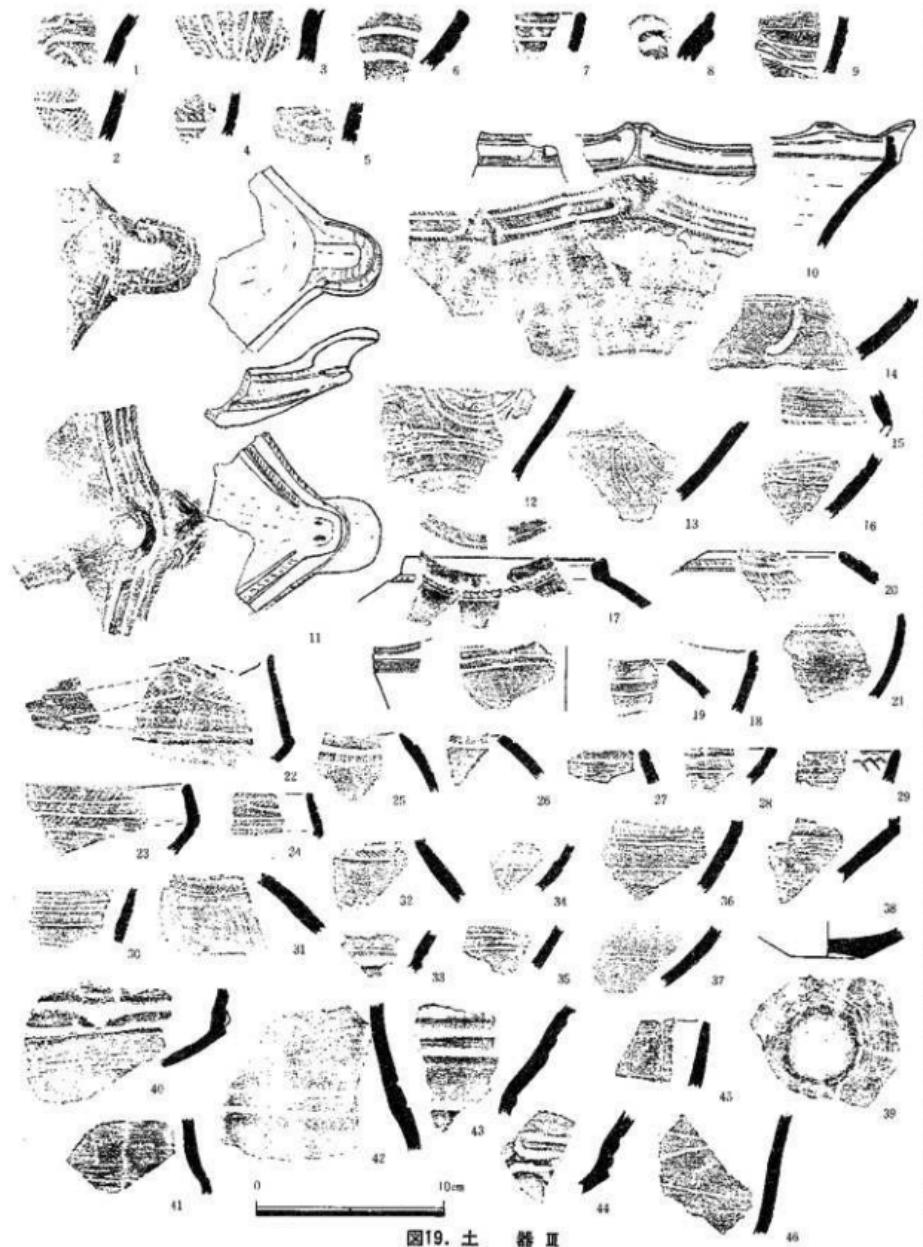


図19. 土 器 III

工具によるものである。

12・14～16は胸部片で、シャープな沈線に区画された擬似繩文である。沈線の終始点には必ず単状口具の刺突孔があり、卷貝ころがしによる施文を行っている。14にはシャープな沈線の終点と他の曲線の始点の間を結ぶ幅広い浅いフラットな凹線が、弧状に描かれている。施工工具は不明。12・14・16は曲線のモチーフであるが、15は横走する直線の部分である。12はこの施文部に赤色塗料が残存している。そしてこれらの内面は、いずれも横に粗く磨かれている。

17・19・20・25・26は強く内窓する無頸の壺形と思われるもので、このうち17は断面三角形をなす口縁部が立ち、13の胸片はこれと同個体である。施文はいずれも擬似繩文であるが、バラエティに富む。

17は尖った口縁端内面に、刺突点で始まり刺突点に終る線を断続させながら巡らし、それから口唇まで幅3mmほどの細かい斜の刻目の文様帶をつくる。肩部上端には幅4mmほどの施文帯を線底に細かく刺突点を連ねた細沈線で区画し、施文帯には3.5～4.0mm間隔の点列を1条巡らせる。13の胸部をみると、線底に刺突点を連ねた平行沈線で区画される列点文は、胸部に何条か横に巡るものとみられ、それから同様の沈線を右下へ弧状に描いて区画し、卷貝による擬似繩文を施して磨消繩文としている。器壁は5～6mmで均質であり、表面は磨き、内面はヨコなで調整している。なお、器表には勧斑がみられる。

20は強く内窓する口縁部で、端部は丸く收め、口縁端から幅12mmほどは強く押しながら薄くし、幅7mmの密な点列線で区画し、一段厚い施文帯を巡らせる。この施文帯は細密で浅い斜刻線を地に4.5mm間隔で1条の点列を刺突する。

19・25はほぼ同様な手法で施文帯を巡らせるが、区画線は浅くやや広いもので、施文は二枚貝腹縁の刺突を密に施したものである。

26は口縁端を平らになでているもので、端部に幅4mmの施文帯をやや太目の沈線で区画し、卷貝による擬似繩文を施して磨消繩文としたもの。

このように無頸口縁部についてみると、口縁端又は直下に施文帯を設けた3様式の施文方法がみられる。

18・21～24・27は短くやや内傾して立ち上る口縁のもので、やはり浅鉢形をなすものであろう。

18はやや内湾気味の器形で、口縁は緩やかな波形をなすものと思われる。口縁端は外方へ尖り気味とし、幅12mmに刺突点に始まり終わる細沈線を巡らせ、口縁までを施文帯とする。施文は二枚貝腹縁を刺突した密な施文で、この施文部内に幅6mmの平行沈線を引いて中間を磨消したものである。

21の器形もやや内渦気味の無痕口縁である。厚さ4mmほどの薄手で小形品であろう。煤が付いている。口縁端は平らになで、口縁から幅7mmの卷貝による擬似繩文帯を沈線で区画している。内外面とも磨いたもの。

22は体部から強く屈折して立ち上る器形で、口縁は大きく波うつもの。器壁は4~3mmで口縁端ほど薄くなる。口縁は末端でわずかに外反し、波頭部下のU字形の深い刻文に文様を集約させている。ヘラ状工具によるシャープな沈線で、口縁に沿って繩文帯をつくる。施文は極く細かい粒のR繩文である。また体部から折れて立ち上る基部にも同様の沈線を1条引き回している。体部外~下面には煤の付着が著しい。胎土には稀れに細~粗砂を含む。

23もほぼ同趣の上器で、体部からの屈曲がく字状で、口縁は短く内渦気味に立ち上り、端部は丸く收める。幅6~7mmの細粒のR繩文帯が、口縁端外面と屈曲部にそれぞれやや太目の沈線によって区画されて横に巡る。器壁の厚さは6mmであり、内面は磨き、外面に煤の付着がみられる。

24・27は口縁端部の小片であるが、口縁から幅狭い施文帯を巡らせるもので、24のようにほとんど直線化した浅く細い沈線で区画されている。施文は極く細いR繩文である。厚さ4~5mmのやや薄手で、胎土に砂は少なく橙色を呈している。28は外反する口縁であるほか、上記とほとんど同様である。29は口縁端を丸く收め、外面はなでているが、内面に二枚貝腹縁の刺突による連続へ字状の施文を巡らすものである。

その他の胴部破片(30~38)についてみると、卷貝による擬似繩文と二枚貝腹縁刺突による擬似繩文の二種を用いたもの30、後者だけのもの33、細かく刻目を斜行させるもの32があるが、その他はすべて卷貝回転押捺による擬似繩文である。

39の底部は胎土・焼成など10又は11に近いものであり、この一群のものとみられる。やや簡略に磨いた凹底で内面は入念に研磨している。

このように、10~39は網沈線で区画された施文帯に擬似繩文・細粒繩文を施す、やや薄手の磨かれた浅鉢形の土器の一群で、彦崎KII式系のものである。

40~44は、やや厚手の磨研した器面に幅広くフラットな凹線を横走させる一群で、器形は浅鉢形であろう。凹線は幅3~5mm、深さの浅いもので、線のエッジは鈍く卷貝尾部による引き線とみられ、福田KIII(宮窪)式系である。

45・46はやや粗製の薄手造りで、細く浅いヘラ描沈線が口縁からは垂下し、胴部では横や斜方向に引いたもので、やはり後期末頃の粗製土器と思われる。

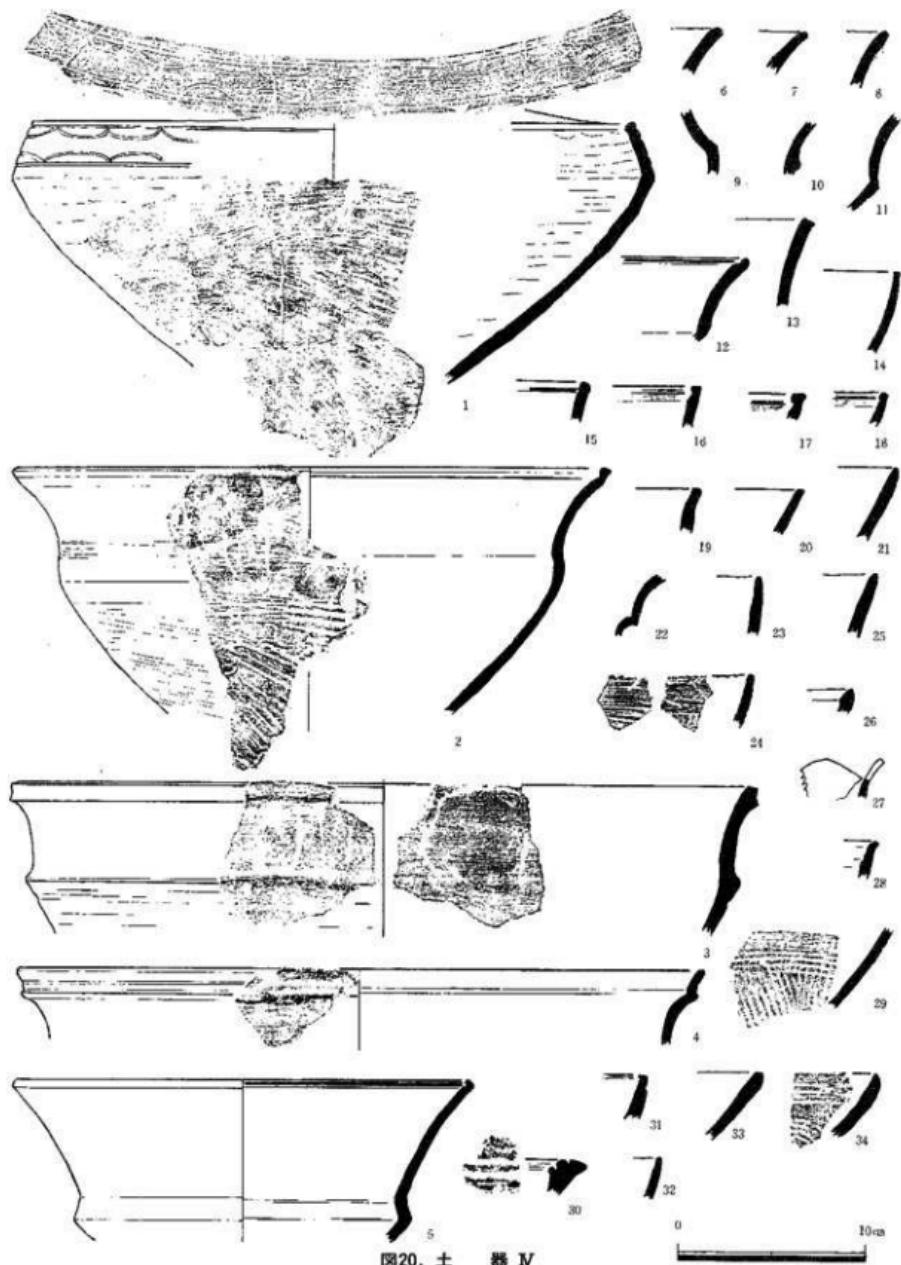


図20. 土 器 IV

4. 繩文晚期前半の精製土器 (図20)

1は口縁が強く折れて内傾する灰褐色の浅鉢で、下体部は二枚貝による条痕が残る。上体部が磨研した施文帯となり、上下に浅く細い平行沈線で区画し、その間に上下の線から内方に向かって弧状線を連続させる。器壁は3~4mmと薄く、内面には削りの手法がみられる。9も類似の胴片である。近畿の滋賀半式に類似するものがあり、黒土B1~岩田IV類併行期のものである。

2は側からS字状に聞く形の灰褐色の浅鉢で、下体部は二枚貝の調整痕が若しい胸張りから上の上体部は粗略な磨形で、口縁端は平坦である。口縁端は内側の段によって厚くしている。以下内側は磨かれたものである。

5は外面はにぶい浅黄色、内面は黒褐色でともに入念に磨研したもの。胴部に稜のある形の浅鉢である。口縁端内面に凹線を入れて口縁端幅をわずかに広くし、やや丸味に磨いている。10~12・15~18・22・31も灰褐色ではあるが、同様に磨研土器の口縁や胴片で、31は口縁の内外面に沈線を巡らすものである。

6・7・13・14・19~21・23・25・32・33は、ほぼ直線的な立ち上りの磨研した口縁部で、施文はみられないものである。これもほぼ上記に準ずるものであろう。そして2以下のこれらは口縁下に凸部をもたぬことから、大まかに黒土B1式前後の頃までの所産と思われる。29・34は条痕調整の半精製土器であるが、やはり同時期のものであろう。

3・4・8は口縁上端近く、断面三角形の低い稜をなす凸帶を巡らせるもので、胴部は強く外方へ稜をもって張る浅鉢(3)である。胴以下は粗く削ったもの。8は貼付凸帶の剥落したもの。原下唇式系とみられる。

なお、30は縁帶文の破片で肥厚した口縁端に沈線2条を巡らせていて津雲A式系であろうか。また24・26・27は擬似繩文口縁の肥厚や隆起するもので、彦崎KII式系に属するものであろうか。

5. 繩文晚期凸帯文土器・その他 (図21)

1は口唇を内外へ強く拡張して凸帯状効果としたもので、外面は粗くヨコなで、口縁端は平坦になでている。

2は口唇を内側に強く拡張し、外側はわずかに下って太く高い凸帯を巡らせ、口唇外端と凸帯上にR縁文を施している。内外面ともなでている。

3・5・8・11・13・17は、ヨコになで或は擦痕の口縁又は胴部の器表に、貼付凸帯を巡らせるもの。内面はヨコなでが多く、二枚貝によるもの(3・13)、擦痕のある(8)もある。

4・6・7・12・14~16・18もほとんど同様であるが、貼付凸帯上にラフな刻目を施す

もので、内面調整はなで或いは二枚貝によるものである。9は胸部に巡らせる凸脊上に強く押し付けた爪形刻目のものである。

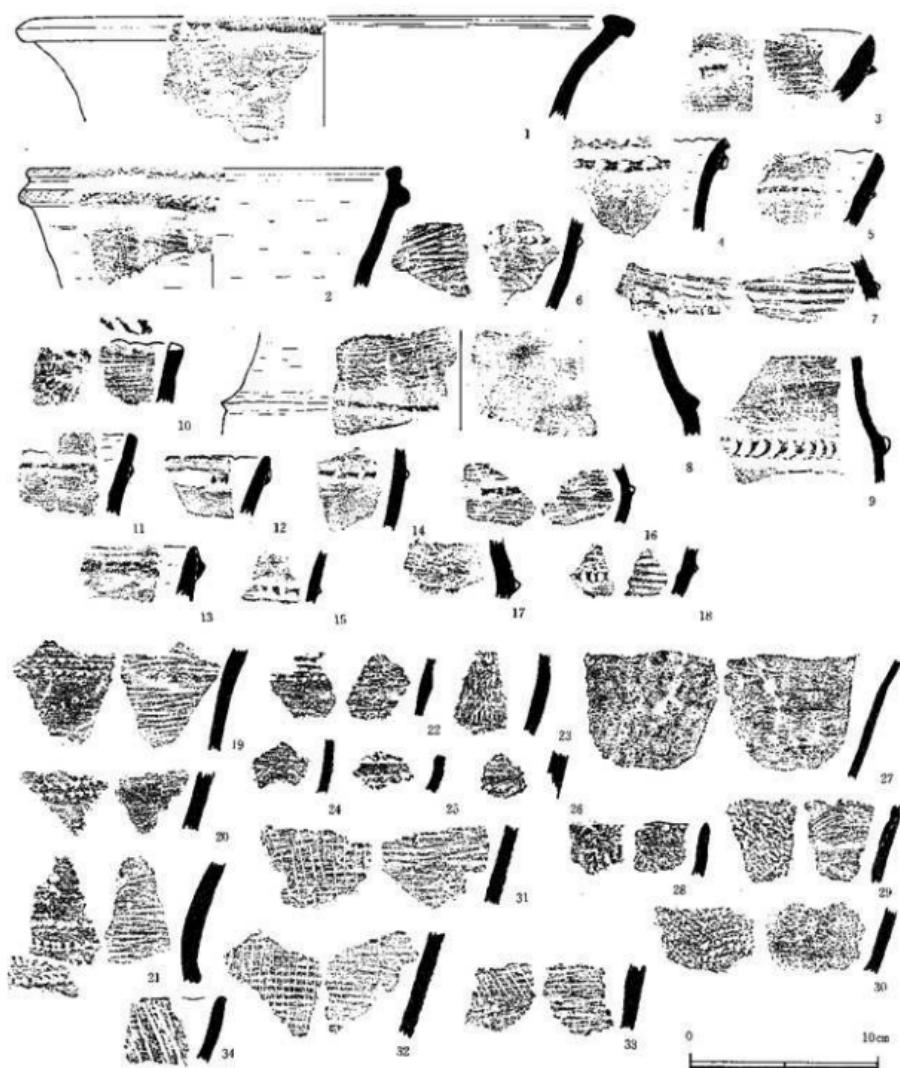


図21. 土 器 V

10はやや粗製の口縁上端に粗く刻目を施したものである。これらは概ね原下層式一黒土BⅡ式系のものである。

その他の上器として次のような破片がみられる。

19~21は粗くなれた器表に小形の斜めに刺突したD字形爪形文を横走させるもので、内面は二枚貝条痕である。いずれも外面上に煤の付着がみられる。原下層式系の土器である。

22は丸棒状工具の刺突点を4列以上横走させた薄手のもの。23は擦りのゆるい繩物状かと思われる押捺地に太丸圧底、さらに小丸棒の刺突を加えて、円形二重刺突文を横に並べ、その上には爪形の押引き文が並ぶようにみられる特殊な施文のもの。6~7mmのやや薄手造りである。24は平行する2列の横線を連続させるもので、半截竹管状工具の押引きに似た施文である。薄手造りで器表に煤が付着している。

25はわずかにL繩文のみられる器表に半截竹管の押引きを横に2列引いたもので、厚さ4mmの薄手造りである。

26は無文地に中空小竹管をやや斜めに刺突した円形文列を施すもの。厚さ8mmの厚手造りである。これらは22~26は、いずれの様式とも判断し難いが、施文からすると後期後半~末頃のものかと思われる。

28~30は繩文地様の破片であり、28は地文から23に近いものとみられる。29・30は同一個体の破片で、R繩文の重複押捺されたもので、やや薄手造りである。27はほぼ同様の器體で無文のものである。内面ヨコなで、表面は斜方向になでている。この27~30について時期・様式を判定難い。

31~33は内外面とも横に貝条痕のもので、器表にヘラ状工具で粗く縱線を引くもの。34は無文地に棒状工具によるやや太目の縱線を並べるもので、いずれも厚手造りである。様式は判断しかねるが、中期の所産ではなかろうか。

6. 繩文粗製土器 (図22-1・2)

1・2は内面に二枚貝の条痕がみられるもので、1は口縁外端に低い凸帯を巡らせる尖り口縁のもの。2は粘土を輪積みした痕跡が器表から認められる程度に粗い擦痕で、口縁端は強くなれて平らにしている。

3・4は内外面ともになで、3の口縁端は強くなれてやや内外へ張り出し気味となるもの。4は口縁上面に1条の沈線を巡らせるもの。

5~7は内外面ともなで、口縁端内側に押圧した刻H(5)や、小角棒を強く刺突連続させるもの(6・7)で、胴部はげいが口縁端は薄く造っている。

8~14は口縁端に刻目のあるもので、半截竹管様の刺突によるもの(8・9)、ヘラ状工

具による刻日のもの（10・11・13・14）、そして12は隆起するII縁で、二枚貝腹縁の刺突による刻日であり、これは沿壁の内外面も貝による条痕調整である。

15はやや薄手で器體内面は二枚貝条痕であるが表は粗くなれ、口縁上端面には蛇行する沈線気味の圧痕がみられる。

16～28・49はII縁上端を平らにならせる一群である。16は大破片で、口径20cmで胴張りのない円筒状の變形上器で、外面は下方から左上方へ搔き上げ氣味に擦痕を残す調整であり、内面は入念にヨコなでしている。胎土はち密で焼成も良い。胴部は厚さ6～7mmで、幅4～5cmの輪積み整作であり、II縁端は内湾氣味に薄くして3mmの厚さにしている。外面には煤の付着が著しい。17・20は口縁端をやや厚くして、上面を平らにしたもので、内傾するもの¹⁷と外反するもの²⁰である。いずれも外面はヨコ～斜に搔き、擦痕であり、内面はヨコになでている。22は5～6mmのやや薄手造りで、内面は磨き氣味であり、外面は粗面の半精製品である。19の内面は指頭でヨコに強く削りなれ、外面はヘラ状工具でヨコになでたものようである。このようにほぼ直立する平頭の口縁部であり、胎土もち密で焼成も良く、外面は粗面だが半精製品ともいべき一群である。

29～35は口縁端を内側に尖らせるものである。器形は大まかに直立する口縁の深鉢形をなすものであろう。いずれも外面はヨコ～斜方向に粗く擦った極く粗面で、内面は粗くヨコなでしたものが多い。胎土には粗砂を含み、厚手造りが多く、煤の付着するもの（29・35）もある。

36～40はやや外開きのII縁で、口縁端を外側に尖らせるものである。特に36は他と異なり、肩部から曲って外反するもので、肩部以下にはL縫文が施されている。口縁部外面と内面はなで仕上げである。37～40の内側はヘラ状工具でやや粗略にヨコなでしたものが多く、外面はなでたもの（38・40）と擦痕のもの（37・39）がある。胎土には砂粒を含むものが多い。

41～48・56は直立する口縁の端部をそのまま上方へ尖らすものである。厚さ7～8mmのものが多く、内面は木片状工具で削り又はなでたと思われるもの（41・44・46・48）と、ヨコなでしたものがある。外面は横に擦過した粗面のもののほか、なでてやや滑面としたもの⁴⁴や、ヘラで斜めに半磨きしたもの⁴³がある。また擦痕調整のものには砂粒を含む胎土が用いられている。

50～55は口縁の聞く器形のものであるが外反しない。口縁端をいずれも丸味をもって收めている。50は外面擦痕、内面は入念な磨き、厚さ4～5mmの半精製土器である。灰褐色の内面に勧進がみられる。53も同様であるが外面に斜行する二枚貝条痕がみられる。その他は内面はヨコなれ、外面は擦痕で、胎土には砂粒を含む。また煤の付着が著しい。

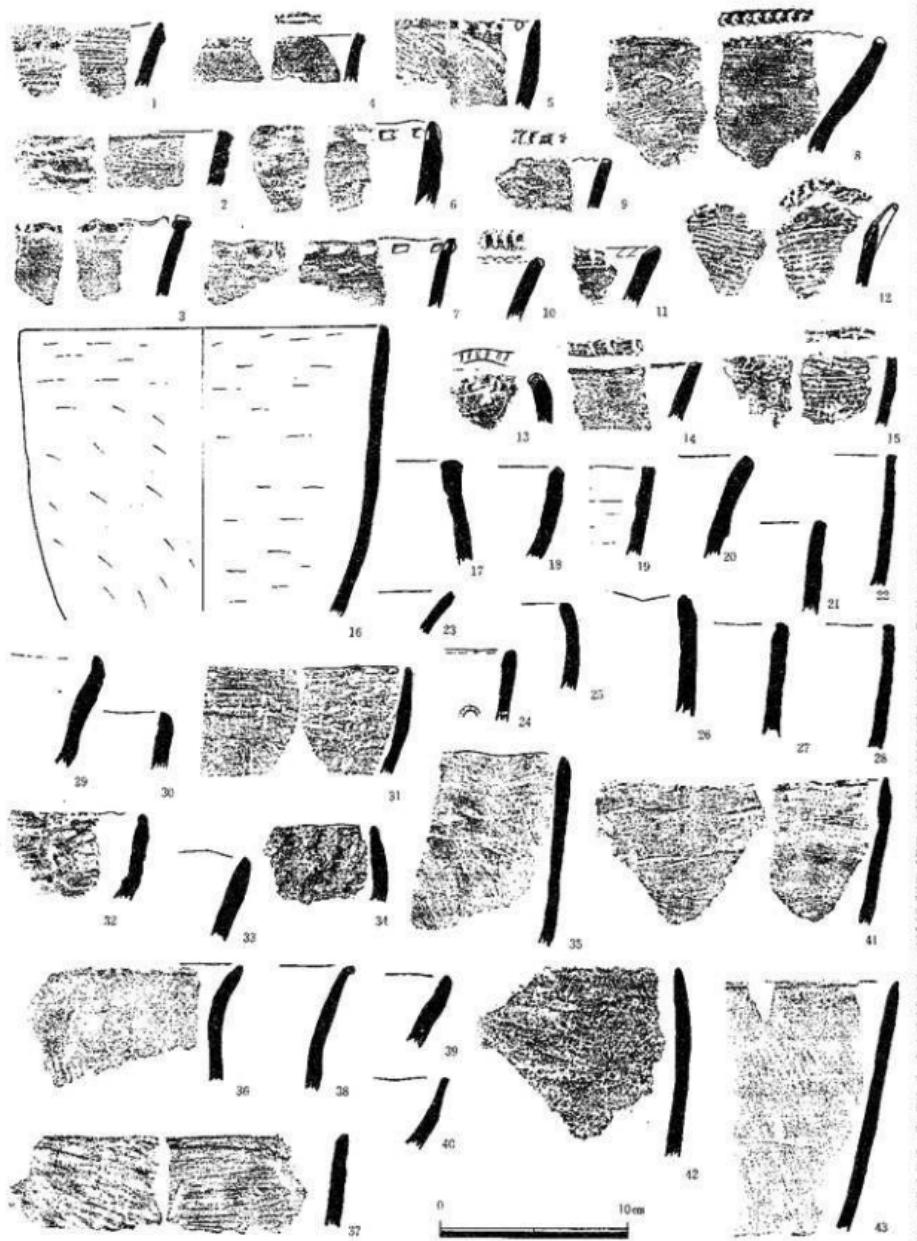


図22-1. 土 器 VI-1



図22-2. 土 器 VI-2

以上の粗製土器についてみる。

1~15には二枚貝条痕、口縁部凸帯、口唇の刻印等のみられる一群と、16~55の外面は擦痕粗面で、施文のない直立を主とする口縁の一群に大別される。時期については明確ではないが、大まかに前者は主に原下層式併行期、後者はそれ以前に位置するものと思われる。

57は復元可能な唯一の土器である。肩部で屈折して頸部はくびれ、口縁は外反する粗製深鉢型土器である。口径37cmで器高は推定32cmくらいである。器壁は6~7mmで均質であり、肩部以下は横~斜方向の条痕がみられる。これは二枚貝腹縁による重複した器面調整による結果とみられる。頸部以上はヘラ状工具による入念な削りで平滑である。口縁にはわずかな高まり部があり全周で2~3か所かと思われる。内面は指頭による入念なヨコの削りなど横条線様の滑面である。胎土にはかなり砂粒を含む。沈線による施文は、口縁の波頭部にアクセントをもつ2条の平行沈線を外縁に、口縁内側には浅く幅広いフラットな凹線を1条巡らせる。口縁の上端は平坦になでている。また肩部上端にも2条の平行する

沈線を巡らせる。なお、口縁波頭部で沈線の盛り上るところの上下線間に巻貝の押捺かとみられる不鮮明な施文が施されている。この土器は下体部は熱を受けて白っぽく体側から肩部そして口縁外面に煤が著しく付着している。岩山式Ⅳ類に酷似する品であり、7A区で検出したものである。

7. 繩文土器底部について（図23）

検出した繩文土器片中底部片は極く小数であり、明確な区分が難しいので、便宜的にここに一括して記述する。

大まかに形態と施文の有無によって次のように分けた。

- A. 器壁が薄いもの及び繩文を施すもの
- B. 凹底又は上げ底に造るもの
- C. 平底のもの

1) A類

1は厚さ3~4mmの極く薄い器壁で、内外面ともなで、底縁は丸味のある平底で、直径6.5cmほどである。胎土や灰黄褐色で堅い焼成の特徴からして羽島下層式である。

2~4は底縁部に削り込みを行って底面を角形の形態にしたもので、いずれも傳手造り。

2は内外ともなで、胴下部を強く折ってやや上げ底氣味にしたにふい黄褐色の焼成の良いもの。3はほぼ同様の造りであるが、平底で器表は下端まで丁寧に粒の細かいL繩文を施すもの。4もほぼ同じであるが、底縁を外方につまみ出し氣味に拡張し、わずかに上げ底とした細粒のL繩文のもの。

この2~4は、繩文地、薄造りに特徴のある磯ノ森式・彦崎ZII(里木I)式系の角底であろう。

5もほぼ同様な繩文地の薄手造りであるが、丸底である。底面はなでている。やはり上記に準ずるものとみられる。

6・8は底までL繩文の付く浅鉢形の上げ底氣味のもの、7は深鉢型の小さい凹底でR繩文の付くもので船元式系の繩文よりやや細いことから、これらも前期末~中期初頭頃の所産かと思われる。

2) B類

9~15はにふい黄褐色~橙色の内外面とも磨き、またはなでの器表で浅鉢型の凹底である。底面も入念になでたものが多い。12には外面に赤色の塗料が認められる。これらはす

べて後期後半～晚期初頭の精製磨研土器にあたる。

16～24は上記より器表の調整が粗略で、タテに削ったもの⑯、ヨコに削ったもの⑰のほかは、粗雑になでたものである。浅鉢形の凹底で底面は入念になでたものが多い。煤の付着するもの⑲もある。粗製と精製の中間的なものであることからみて、大まかに晩期のものと思われる。

25～29は上げ底又はそれに類するものである。25は整った形の深鉢底部で、器表は下か

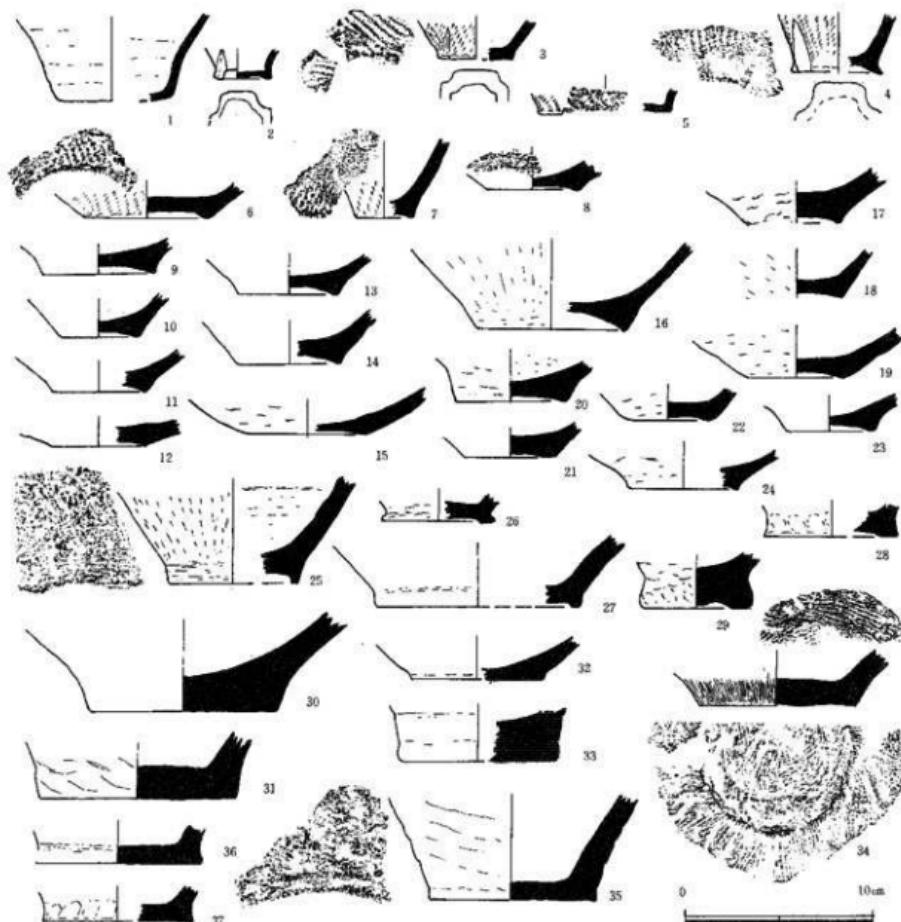


図23. 土 器 VII

ら斜め上方へ一枚貝腹縁で粗く搔き上げ、高台状の上げ底とし、底縁と底面はなでている。器壁は厚いが高台は薄い。中津式併行頃の所産かと思われる。

26は小形の、27は大形の上げ底氣味のものである。器面調整は26は不明、27は粗略な斜方向のなでで、いずれも底縁をヨコになで回し底面もなでている。胎土には砂を含み、橙色系で焼成の良いものであり、中津～福山K II式併行期のものであろう。

28・29はわずかに上げ底氣味のもので、底縁部を強く指圧して整形したため、つまみ出し状となっているものである。器底部の厚さも厚く、29は19mmもあるなど、大形の粗製深鉢の底部であり、後期に属するものであろう。

3) C類

30～37は平底のものである。32の大きく開く浅鉢のもの以外はすべて深鉢型のものである。いずれも底縁部に押圧が加わったため、何程かの外方への張り出し状を呈するもので、36・37には著しく指頭の凹凸が認められる。器表についてみると、浅鉢32はなで、大形深鉢（30・33）は入念なで、31はヘラで強くなで、34は二枚貝の条痕、35は擦痕状である。底面も17～21mmと極く厚いもの（30・31・33）がある。これらは大まかに晩期に属するものと思われる。

8. 弥生式土器・土師器・須恵器（図24）

1・2は口縁端に刻目状の短く外反する變形土器である。2は頸部に多条の沈線を巡らすもので、内外面とも丁寧になでている。

3・4は強く折れて水平に近く外に聞く口縁のもので、器表はヘラで磨いている。弥生前期の土器である。

6～10は櫛描多条沈線と、その下に三角形又は刻目状の刺突文を巡らせる胴部片である。12はヘラによる細線の綾杉文の胴部片、13はヘラ磨き調整した變形土器の大きい底部である。これらは弥生中期に比定される。

5は肥厚した口縁帶のある變形土器で、口縁帶に2条のしっかりした沈線を巡らせるもの。外面はなで、胴部内面は削り放しの手法である。

11は小形の変形土器の肩部かと思われる。小片で内面はなで、表面は磨いた面に8条の櫛描細線が3段に施されるもの。14はヘラ磨きの平底部分で、この3点は弥生後半とみられるものである。

15は複合口縁の付く變形の土師器で、外面は入念なで、内面胴部以上は削り放しであり、古墳時代前半までのものである。

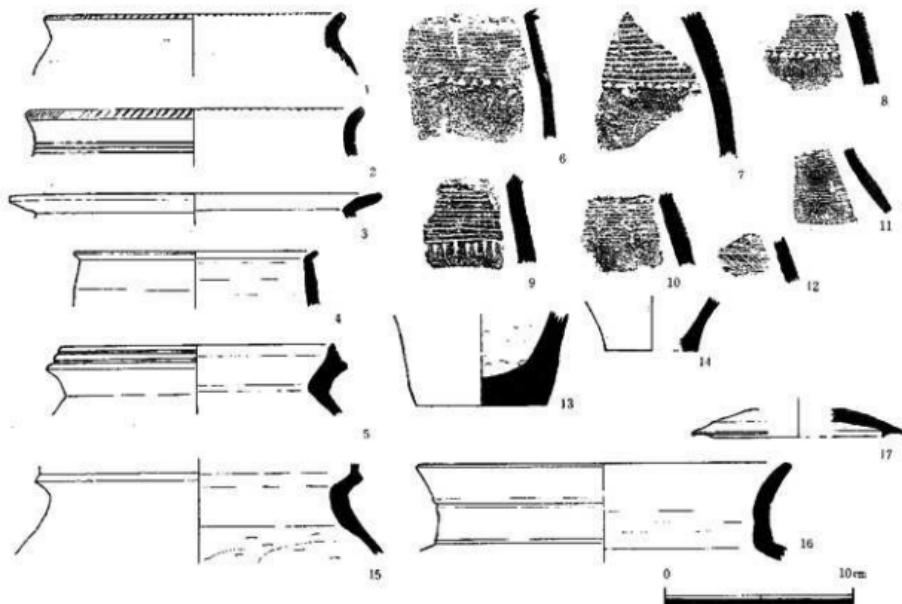


図24. 土器Ⅶ

16・17は須恵器である。16は単純に立ち上り気味に短く外反する口縁で、頭部上端に浅い凹線を1条廻すもの。17はつまみの付く壺の蓋で、直徑11.4cm、わずかに段状をなすかかりがある。内面は回転なで、外面は粗くヘラ削りである。いずれも歴史時代に入るもので、山陰須恵器編年のⅣ期にある。

9. 小結

このように出土した土器は、縄文前期から晩期に至るほとんどの様式が網羅され、わずかではあるが、弥生～古墳時代遺物もみられた。

縄文前期では、大形連続爪形の羽島下層式系、平行線間に爪形文をおく磯ノ森式系、わずかではあるが口縁下に強い刺突文を巡らせる彦崎Z I式系、爪形を施す特殊突帯文の彦崎Z II（出井里木I）式系がある。数点ではあるが九州を主とする貝条痕地に微隆線文の轟式系と、胎土に滑石を多く含み太い横目状短線文の曾畠式系も確認された。このほか巻貝による扇形押圧文の破片もあり、大歳山式系かと思うが、或は後期の月崎上層式であるのかもしれない。

中期では太縄文地を特徴とする船元式は、当遺跡で周知されていたII式を主とし、III式

系も認められる。続く撚糸文を代表とする里木II式も顯著で、続くIII式系も認められる。この頃の口縁を内外に折返して繩文を施す山陰の波子式は、ほとんど認められなかった。

後期ではダイナミックな曲線を配した磨消繩文の中津式系と、続く磨消繩文の福田K II式系・縫帶文の津喜A式系はともにわずかであるが、後半期の磨消繩文の終期であり、種々手法の擬似繩文を施す彦崎K II式は極めて豊富となり、木葉の凹線文を上とする宮滝式（福田K III）式系へと続く。

晩期ではその初頭に位置される磨研沈線文の岩印式（第IV類）（黒土B I式）系は顯著であり、施文に近畿の滋賀型式に酷似するものも含む。出土の約半数を占める粗製土器や磨研無文のものは、主としてこの後期後半から晩期初頭へかけての一群とみられる。中葉の口縁をやや拡張し、わずかな沈線の原下層式、それに続く後半の凸帶文を巡らせる黒土B II式は希薄となる。

弥生時代に入ると前期・中期・後期ともに各數片を認めるだけとなり、古墳時代前半期の土師器が若干認められた。

終末期に近い須恵器片は、出土地点を異にして数点を認めた。

C. 石器

1. 石鏸・他（図25）（表2）

石鏸は採取した30点のすべてを示す。

石材は安山岩製21点、黒曜石製9点である。

大きさは長34.0mm、幅23.4mmのものが格別大きいが、概ね長さ13~21mm、幅11~17mmのものが多く、長さ幅とも10mm前後の小形品の一群もある。

1~4（安山岩製）及び22（黒曜石製）は、抉りが深く正三角に近い小形のもので、特に1~4は片脚のみが長い製作であり、繩文前期的な形態といえよう。

5~7（安山岩製）及び23・28・29（黒曜石製）は抉りが深く、特に5~7は脚部のつくり出しにアクセントのあるもので、やや古い様相を示す。

8~11（安山岩製）及び27・30（黒曜石製）はやや抉りが浅く、長三角でシャープなつくりがあり、やや新しい形態とみられる。

また12~21（安山岩製）及び26（黒曜石製）は抉りが弱いかまたは無いものである。特に16は五角形をなし、20・21は片面は剥離のまま未調製のもので、これらは繩文晚期的な形態と思われる。

このように繩文時代前期から晩期に亘るとみられる諸形態のものがある。

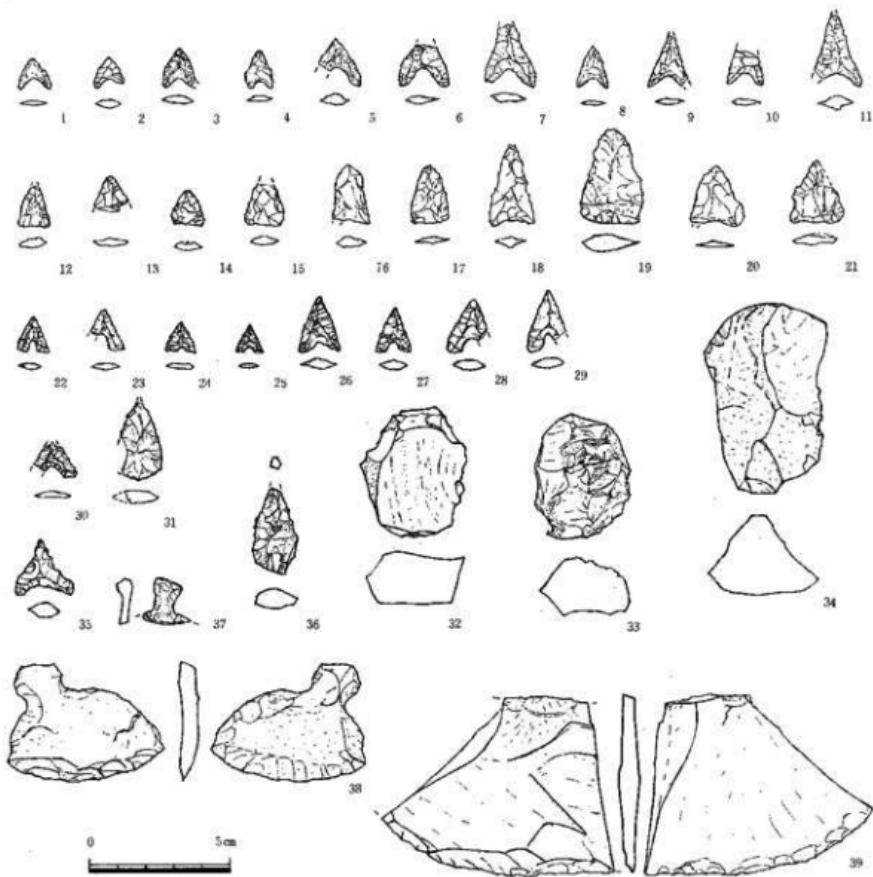


図25. 石 鑿・他

31は鎌としては大形で、しかも抉りではなくかえって突起状をなすが茎とはいえない。大形鎌であるか小形の槍先ともみられるものである。

32～34は石材が黒曜石で、34は自然面が多く残り剥離した面は少なく3か所のみで、未使用原材料である。32は上下2面を平らに落とし、外周を巡るように小さく縦長に剥離した残りの核である。33は側面2方向から大きく剥離した残りの部分で、不定方向から小さく打ち剥ぎしたものとみられる痕跡がある。いずれも黒色で肉眼的には石鎌と同質のものとみられる。

35は黒曜石製の三方に尖る石鎌に近い形のもの。図の左端がわずかに欠損している。線

表2. 刀器計測表

No.	種別	石材取上No.	最大長(推定)	最大幅(推定)	現重量	形態	抉り	調整
1		11A622	10.5	11.4	0.20g	三 角	△	全 面 ヤ ャ 整
2		11B242	11.0	10.5	0.20	* 片ヨク	*	*
3		11A518	13.5	11.0	0.27	*	*	*
4		9A195	13.0 (14)	9.5 (11)	0.25	*	*	(ヨク折)
5		6B 92	17.0	13.0 (15)	0.45	長ヨク(クワ形)	*	*
6	玄	9A 26	14.0 (21)	17.0	0.55	* (*)	*	*
7		9A 53	21.5 (23)	18.0	0.95	*	△	*
8		11A366	14.0	10.5	0.22	長三角	*	* シャープ
9		8B226	17.0 (19)	13.0 (15)	0.35	*	*	*
10		P16下層	11.0 (19)	12.0	0.35	*	△	*
11	山	11B401	25.5	16.0 (18)	1.15	*	△	*
12		8B314	13.0	10.5	0.45	三 角	なし	や や 粗
13		10A355	12.0 (14)	11.0 (14)	0.35	*	*	*
14		11B233	12.0	12.0	0.44	*	*	整
15	鐵	11A541	14.5 (16)	14.0	0.80	*	裏近く剝ぎ	ヤヤ整
16	岩	9A189	21.0	13.0	0.95	五 角	*	全 面 *
17		9A 31	20.5	12.5	0.70	丸味五角	*	粗く剝ぎ ヤヤ粗
18		9A191	29.0	15.0	1.20	長三角	△	全 面 整
19		8B218	34.0	23.5	5.15	やや長三角	なし	片面ハギ ヤヤ整
20		P13下層	20.0	18.0	1.02	三 角	△	粗
21		10B176	21.5	19.0	1.31	*	なし	裏周辺のみ
22		8A171	12.5	11.0	0.22	*	△	全 面 整
23		8B257	14.0	12.0 (14)	0.25	*	*	*
24		7B 56	10.0	10.0	0.17	*	*	*
25	風	9A178	10.0	9.5	0.14	*	*	*
26		11A172	19.0	13.5	0.36	長二角	△	*
27		10B285	15.5	11.5	0.35	*	△	*
28		9A202	19.5	12.5 (14)	0.69	*	*	*
29	礫	8B314	20.5	13.0 (15)	0.63	*	*	*
30		11B419	11.0 (14)	13.5 (15)	0.32	三 角	△	裏周辺のみ やや整
31	槍?	9B185	26.5 (27)	13.5 (16)	2.60	長三角	△	全 面 整
32	石核	9A242	4.5 × 3.5 × 2.0	わずかに自然面あり				長円板状
33	*	11A506	4.5 × 3.5 × 2.5	自然面なし				半球状
34	*	9B304	7.0 × 4.0 × 3.0	自然面多し(2面)				三角錐状
35	製形	11B586	20.0	20.0	1.15	△ 叉		全 面
36	ドリル	7B113	29.0 (?)	16.0 (40折)	3.35			*

辺はすべて表裏から細かく調整したものである。使途については不明の異形石器である。

36は黒曜石製のドリルで、先端が欠損している。欠損部の太さは 4.0×3.5 mmの五角形をなしている。

37はやや濁った赤色のメノウ製石匙のつまみ部分である。上端は折ったような面であり、つまみのくびれ部は内面から微細に調整している。

38は安山岩製石匙で、表面は平坦な自然面が多く残っており、周辺部分のみを調整し、裏面は大きく剝離した一面のみで、わずかに刃部とつまみのくびれ部に調整を行ったものである。

39は横長の幅広く薄く剝離した素材を、主として表の刃部を調整して曲刀としたもので、裏面の刃部調整はわずかで片刃状に仕上げている。刃部の使用による磨耗は判然としない。左右両端とも欠損していて全形姿が明らかでないが、石鎌状とも石包丁様ともみられる削器類である。

2) 石斧 (図26) (表3)

1~11は磨製石斧、12~20は打製石斧である。

1~3は乳棒状に近い石斧である。1は荒削りの痕跡を残す程度に側面を粗く研ぎ、刃部のみ約4cm研磨したもので、直刃に近く、右側面がやや強くふくらむことから右利きの使用したものと判る。背面の風化が進んでおり刃部の使用痕は判らない。

2は太くやや楔形をなすもので刃は曲線をなす。頭端は打欠き状であり、わずかに欠損しているのかもしれない。側面は全周細かく敲打しており、刃部のみ入念に研磨して、刃部はふくらむ。

3は全体がわずかに曲る器体で、全周と頭端も粗く研磨整形し、刃部は切刃状原刃に入念に研磨し円形の刃をつくるもの。

4は刃部が欠失しているが大型品である。頭部は尖り断面長円形の乳棒状である。外周すべて粗い敲打整形である。

5はやや短櫛形で断面菱形である。側面は粗く磨き、頭部は打欠き後粗く磨いたもの。刃部のみ入念に研磨している。薄刃造りで刃はあまり曲らない。

6は断面長円形の薄手で頭部は折損している。外周すべて磨き、刃部との界が不鮮明。前後端を丸めた直刃状である。

7は刃部が欠失している。打裂痕が残る程度に外周を磨き、頭部は丸く收めている。断面長円形。

8はほぼ短櫛形をなすもの、刃部は一部欠失している。断面は長方形気味の全面磨いて

表3. 石斧計測表

No.	区分	取上No.	法量(cm)			重量 (g)	石材	備考
			長	幅	厚			
1	磨	9A239	11.5	4.6	1.6	128	安山岩	
2		11A142	10.7	4.9	3.5	274	片麻岩	
3		8A379	9.6	5.6	2.4	284	安山岩	
4		11B373	(10.3)	(5.5)	3.5	(324)	玄武岩	欠損
5		8A238	10.2	4.3	1.7	113	安山岩	
6		8A207	(6.5)	5.5	1.7	(115)	々	欠損
7		8A260	(10.3)	4.8	2.5	(183)	々	*
8		8A214	10.4	4.0	1.9	125	閃綠岩	
9	製	8A302	(—)	(—)	(1.6)	(60)	斑岩	欠損
10		10A307	12.0	4.0	2.5	200	閃綠岩	
11		11A3	(—)	5.6	(3.0)	(85)	片麻岩	欠損
12	打	8A66	(9.9)	5.5	2.1	(185)	泥岩	*
13		7B88	13.5	5.0	2.2	204	々	
14		8B149	9.5	3.8	1.6	82	玄武岩	
15		11B55	(7.4)	4.1	1.7	(68)	泥岩	欠損
16		8A20	(7.6)	(4.7)	1.5	(70)	安山岩	*
17	製	表採	(9.5)	5.2	1.7	(119)	閃綠花崗岩	*
18		10A271	9.5	3.5	1.4	77	閃綠岩	
19		11A122	(9.5)	5.2	1.6	(132)	玄武岩	欠損
20		11A155	(9.3)	6.3	2.2	(175)	々	*

おり、刃は後方の上の柳葉状である。中央部分がわずかに薄い。

9は硬質の石材で刃部のみの破片である。両面ともよく研磨しており、刃部はヨコに体側部は右下りの斜方向の研磨痕が認められる。器形は不明確であるが、厚さ1.6cm以上でやや大型品である。

10は整形の短櫛形で、1側面は掠切りであろう。刃は蛤状で体部は敲打のち粗く研磨し、頭端は打欠きとなっているが破損のためであろうか。

11は大形品の刃部である。厚刃造りで蛤刃である。刃線はゆるくS字状をなす。刃部にわずかに研磨痕が認められる。

このように磨製石斧1~4は縄文時代特有の乳棒状を呈しているが、5・6・10・11は蛤刃に近いもので、縄文晩期以降の様相かと思われる。石材は打製石斧より硬質のものを用いていることも指摘し得る。

12~20はやや打ち削り易い岩質を用いた打製石斧で、裏面には大きく剝離した面、又は自然の滑面を残し表面のみを打ち削ぎ整形したものが多い。13のみは両面加工している。

12・13・15は泥岩、14・19・20は玄武岩、17は内緑花崗岩、18は閃綠岩、16は安山岩である。14の裏面は磨耗しているが、使用痕は明確ではない。

いずれも鍬のような使用方法が想像される形状である。また石材は磨製石斧の場合より

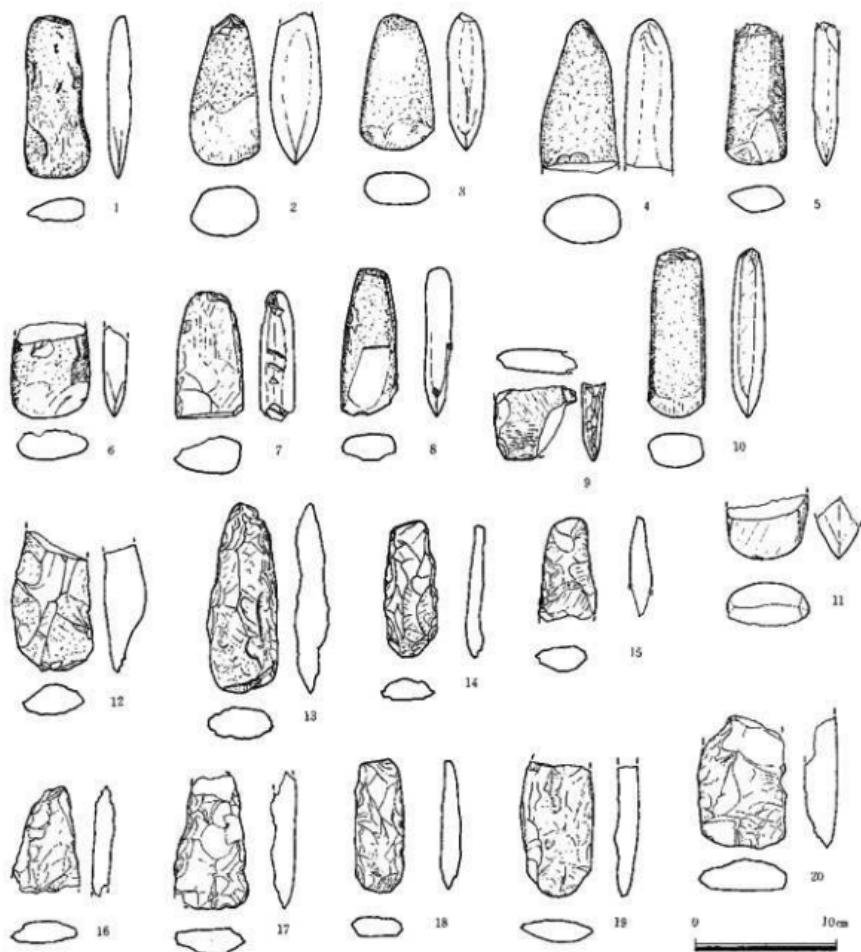


図26. 石斧

概ね軟質といえよう。

3. 石錘 (図27) (表4・5)

石錘は極く小さい21gのものから1kgを超える大型のものまで合計375点の大量出土であった。特に石器(石錘)工房と思われる石組み付近からは多数がまとまって出土している。これらについて大きく欠損したものを除く362点について長さと重量とによってみると

表4. 石錐測定値表

年 月	-16	-23	-30	-37	-56	-60	-70	-80	-90	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	220	240	260	280	300	320	340	360	380	400	1000	年 月
12~																																
11~																																
10~																																
9~																																
8~																																
7~																																
6~																																
5~																																
4~																																
3~																																
2~																																
1~																																
0~	1	1	9	11	18	22	26	29	35	23	18	9	14	15	6	4	2	11	9	7	12	3	3	13	5	3	2	362				

全 体
長さ平均=7.05cm±1.02 (標準偏差) 重さ平均 132.2kg±61.82 相関係数 $r=-0.86 \pm 0.08$
大型(180g以上)を除く 286個 $\bar{x}=8.60 \pm 0.09$ $s=95.88 \pm 22.56$ $r=40.63 \pm 0.01$
全体の平均直線 $y=42.323X+16.56$

表5. 石錐計測表

No.	区分	取上 No.	石 材	重 量 (g)	No.	区分	取上 No.	石 材	重 量 (g)
1	擦 切	11A393	泥 岩	42	21		8A294	泥 岩	245
2		7B 28	*	98	22		9B258	閃綠花崗岩	272
3		11A 87	砂 岩	111	23		8A225	泥 岩	230
4		11A337	*	21	24		10B 89	砂 岩	255
5		9A152	粗 面 岩	45	25		8B292	*	314
6		8B500	*	35	26		8A301	泥 岩	333
7		9A176	花 岗 岩	45	27	打	10A147	*	303
8		9B 3	砂 岩	49	28		9B248	花 岗 岩	335
9	打	9B151	粗 面 岩	66	29		10B152	泥 岩	457
10		9B175	泥 岩	65	30	欠	10B211	*	1040
11		11B296	*	66	31				80
12	欠	11A310	*	74	32				95
13		8A211	花 岗 岩	75	33	合	11A577	泥 岩	133
14		8A509	泥 岩	75	34				122
15	き	8A205	*	85	35				82
16		7A104	砂 岩	82	36				94
17		9A103	閃綠花崗岩	102	37				104
18		7B120	泥 岩	105	38				95
19		6B131	*	155	39				75
20		8A185	*	258	40				61

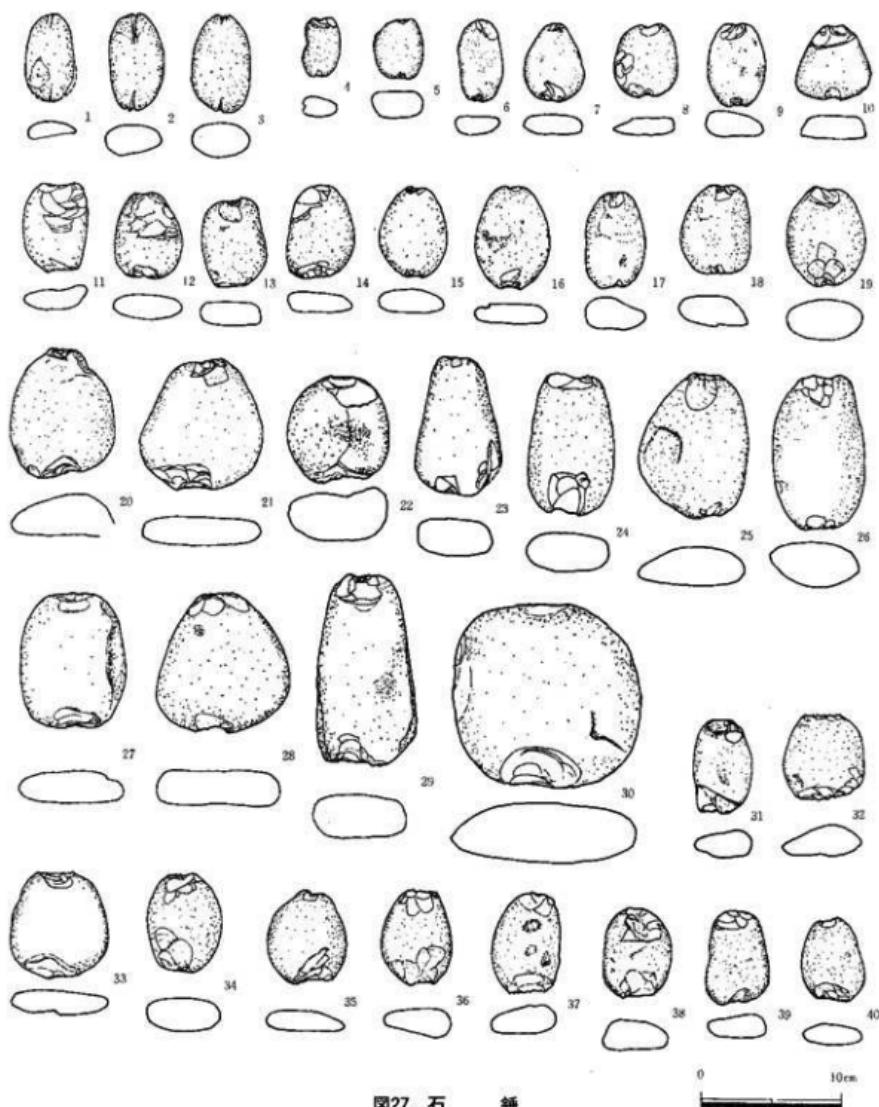


図27. 石錘

表のようである。

大まかに180g未満の中～小型品と200～400gの大型品があり、石材の長さと重量との間に相関が強く認められる。小型の擦切り品3個のほかはすべて長軸両端を打欠いた製品の

みであり、重量からみると70~120g、200~260g、300~330gの上群がうかがわれる。長さは5.0~8.0cmの範囲に入るものが多い。

石材は加工し易い泥岩が最も多く、砂岩や風化の進んだ花崗岩も用いられている。形状は扁平な長円形~橢円形で、いずれも付近の川原から採取したものと思われる。

使途については擦切りの切目をもつ石錘は、他例からして漁網用と考えるのが至当のようであるが、多量の打欠き製石錘は、その法則とともに一概に漁撈用のみではなく、特に中~大型品については織物製作のおもりであった可能性も考えられてよかろう。

図の1~3は切目型で、4以下は打欠き型である。4~5は特別に小形で、6~10は小形、11~24は中形、25~28は大形であり、30は1kgを超す特大品である。このうち26~29は幅が狭く長い形状をするもので、上記のように漁網錘であるよりむしろ織物用と見ることも可能であろう。

31~40は石組4遺構(石錘工房跡)にまとまって置かれていた一括出土品である。石材は泥岩7個、花崗岩2個、閃緑岩1個で、重さは61~133gで、長さは6.2~7.5cmで大きさはよく揃っている。なお伴出土器からこの一群は縄文後期末に比定されるものである。

4. その他の石器(図28)(表6)

1~3は凹石ですべて全面を磨いている。1は上下両面に凹部をつくる。2~3は長軸

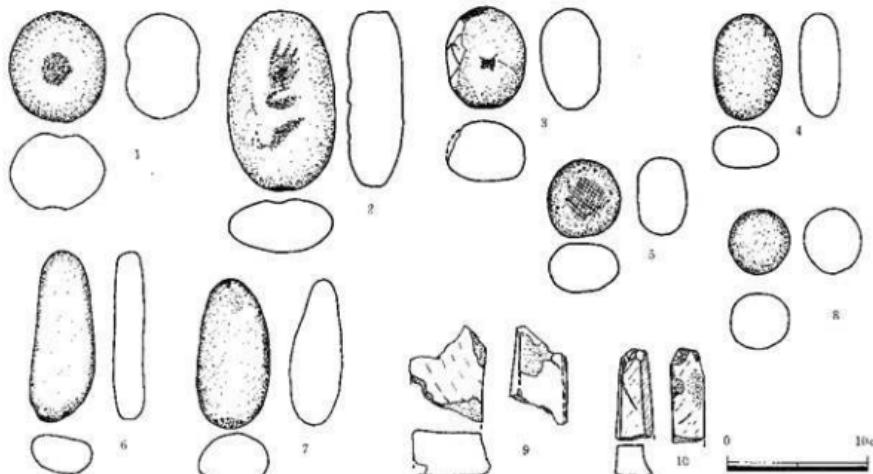


図28. その他の石器

端に叩痕があり、叩石としても用いたものである。2は泥岩で軟質である。

4・5は磨石で特に5は上下面の平らな部分の磨耗が著しい。6・7は乳棒状に近い河原石で太い端部に叩痕が認められる。これらの石材は2を除いて花崗岩又は閃綠岩系の硬い岩石である。

9・10は砥石の破片で、9は2面が、10は4面ともに砥面である。10は片岩でやや硬い砥石である。石材の硬さから金属用とは考えられず、石器（石斧など）の研磨用と思われる。

表6. その他の石器

No.	種別	取上 No.	石 材	重 量 (g)
1	圓 石	8B264	花 崗 岩	383
2	〃	9A131	泥 岩	575
3	〃	10A309	閃 緑 岩	248
4	磨 石	8B198	閃綠花崗岩	165
5	〃	8A369	閃 緑 岩	173
6	叩 石	9A176	輝 緑 岩	241
7	〃	7B 44	花 崗 岩	206
8	投 弹	10A328	閃綠花崗岩	105
9	砥 石	表 標	玄 武 岩	(160)
10	〃	11B 3	片 岩	(66)

5. 台石 (図28) (表7)

11A・B区の石組4造構付近には作業台石又はそれに類似する石が数多くあった。ここに掲げた11点は作業による磨耗の顕著なもののみである。

いずれも花崗岩の川原石で、20~30cmの扁平な石材の平坦又はわずかに凹面をなす面を利用している。

1~3はやや小形で専ら研磨に使用したものである。上面に敲打痕はなく、平滑に磨耗して、1は縁辺部に打痕が認められる。また2は強く焼けている。

5~10はやや大形の石である。形状は上記と同じく平坦な面を上面に据えるのに格好な石である。5・6・10は叩痕は顕著ではないが、その他はいずれも中央付近に叩痕が認め

表7. 台 石 計 測 表

No.	取上 No.	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	石 材	面	備 考
1	11A636	21	17	6	花 崗 岩	表・裏 平面	側端に叩痕
2	S1 2	19	16	6.5	〃	表 磨面	強く焼けている
3	11A630	22	22	5.5	〃	〃 〃	叩欠けあり
4	11A627	25	21	7	〃	〃 やや磨耗	側端自然欠けあり
5	11A640	33	26	6.5	〃	〃 磨耗	縁辺部に叩痕あり
6	11B613	33	21.5	9.5	〃	〃 叩痕と磨耗	裏面割れ欠け
7	11B611	27	19.5	9.5	〃	〃 〃 〃	
8	11A638	29	23.5	9.5	〃	〃 〃 〃	
9	9A252	27	22.5	8	〃	〃 〃 〃	
10	11B614	23	19.5	10	〃	〃 やや磨耗	ヒビ割れあり
11	11B616	26	21	8	〃	磨面 裏 中央叩痕	

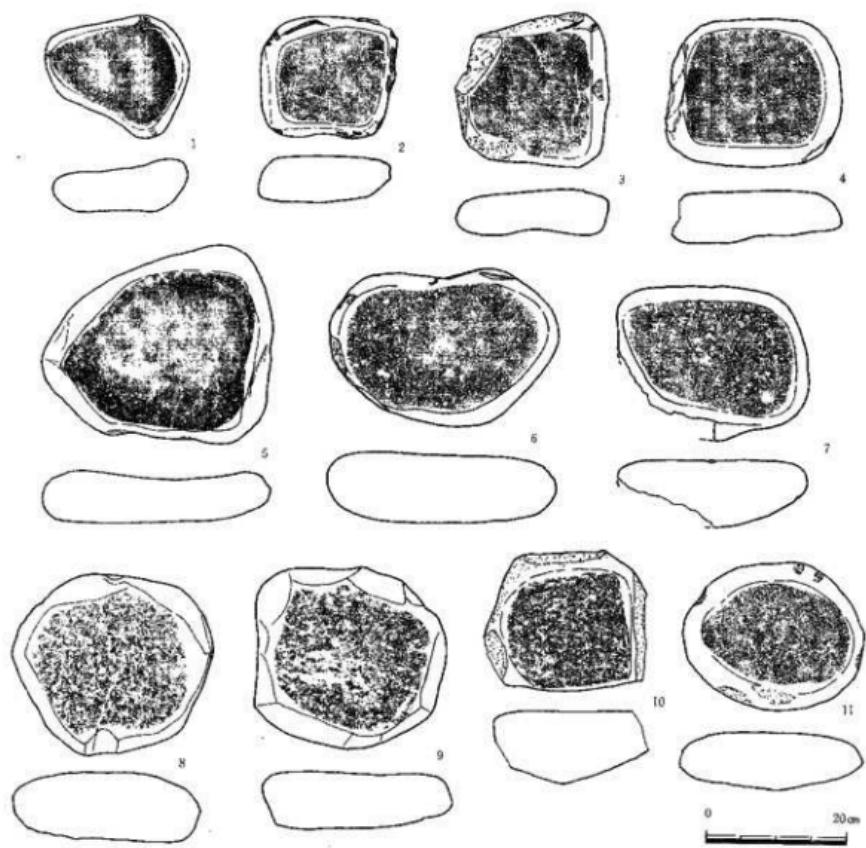


図29. 台 石

られる。そしていずれも上面のみが他の面より平滑であり、人為的に磨耗したものである。

このように叩きと研磨の作業に用いた台石であるが、何の製作に伴うものかは不明である。付近からは打欠き製石錘が夥しく出土し、また石錘や剝片の量も多く出土しているところであることから、敲打はそれによるとしても研磨作業は食品の粉碎のためであったのであろうか。

ここに示した台石のほかにも20kgを超す大きな石材で上面がわずかな凸面をなすものも点在しており、これらも作業台として使用した可能性が強いが、河原石のため自然面との弁別が難しい。

6. 小結

石器は鐵・石斧・石錐や作業台石のはか石匙や磨石等も出土した。また刀器製作に伴う剝片も多數採取した。

このうち特に打欠き製石錐は多數であり、特徴的である。

石錐の形式は極小型で抉りが深く片翼の長いものから、鍤形鐵や翼の張る大型品、そして片面加工の粗略な三角鐵や五角形鐵があり、新旧の諸様式がみられる。

石材は安山岩がやや多く、黒曜石は純黒色で製品数量はやや少なかった。しかし黒曜石の加工原材塊や剝片は、むしろ安山岩より多く出土しており、総合的にみるとほぼ等しいものと思われる。

石斧は府製と打製があり、安山岩・閃綠岩・玄武岩・片麻岩などの硬質の石材のはか、打製石斧には軟質の泥岩も用いられており、片面加工の製作技法とともに後晩期の打製石斧の使途を示唆するものといえよう。また磨製石斧は刃部のみを研磨した敲打製品も多く、やや時代を遡るものと思われる。

石錐は極く小型のものから超大型品まで多數出土しているが、そのほとんどは長軸両端の打欠き製であり、当遺跡内で採取される泥岩や砂岩の河原石を用いている。石組み造構に伴う一括出土品も多く、それらは法量のよく揃ったものであった。

また、石組み造構は概してその主要部に、25~35cmの平坦な作業台石が据えてあり、伴うように打欠き製石錐が出土している。花崗岩の台石には川石の磨耗した滑面が認められ、打痕のあるものもあるなど、その使用方法が磨擦と叩きの台であることから、石器製作の台としてのみではなく多目的に使用されたものと思われる。

長円形で厚みのある全面を磨いた凹石は上下両面に叩き潰しによる凹みをつくるものがあり、またその長端には叩痕があって叩き石としても使用したもので、磨石・凹石・叩石の兼用石器である。乳棒状自然石の端部に叩痕や磨痕のある叩石もある。

ピンポン球ほどの正球形の石器は1点のみの出土であるが、第一次調査でも出土しており、他例からしても狩猟用の投擲であろう。

このほか石匙は安山岩製の完形品とメノウ製の破片があり、他にメノウや磷石の石材片も出土した。

石材はこのように刃器については搬入されたものが多く、礫器は手近な河原石のみを使用している。

IV まとめ

昭和55年度の第一次試掘調査と今度の第二次発掘調査で調査した部分は、南山麓部から北の阿井川岸近くまでの約100m、幅10m余りの範囲で、この下鶴倉遺跡のほぼ中央を横断する部分である。東西方向への拡がりは未確認ではあるが、かなり広く現水田下に遺存していると考えられる。

第一次及び第二次の調査にあたって気付いた諸点を、以下に列記して結びとする。

なお、かつて刊行した第一次調査報告と重複する事項もあることを断つておく。

1. 立地について

出雲地方山間部では、宮山・幕地など特徴ある縄文遺跡が相次いで発見され、その豊富な内容が明らかにされつつある。そしてこれらの遺跡の立地には共通性がみられる。丘陵先端の河岸段丘上にあり、河川はそれを大きく迂曲して流れしており、巨礫の埋没する河川の砂地を地山に、その上に堆積した黒色土層の下面近くに縄文の生活が営なまれていることである。そして清流のほとりで水害のないところ、排水の良いところでもある。この条件は縄文人の当地方における生活の場選びの一つの類型であると思われる。

2. 遺跡の土層について

本遺跡では、遺物・遺構は厚い黒色土層の中位以下にあり、黒色土のため現場での分層は困難であった。加えて土器様式の新旧が上下混淆して出土するなど、混層も考えられるなどで、明確な遺構面の把握ができなかったのは遺憾である。理化学的な検討として、柱状土層標本を採取して、化学分析を依頼した。これによって概ね黒色土層中位に層界が判定され、これは遺物を包含する範囲と一致する結果となった。このほか検討すべき事項として、化石花粉の検出や降下火山灰の鍵層検出なども考えられるが実施していない。

土器片の出土状況でみると、縄文前期から晩期に至る長期間が黒色土層の下面近く約30程度の厚さに混在する結果となり、擾乱混層かとは思うが今一つ明快ではない。

石組み遺構を中心とする石錠等の出土レベルには、やはり一つの面が認められ、これをもって縄文後期末～晩期初頭の生活面とみることができる。

3. 遺構について

主な遺構として集石状の石組み遺構や、標石状の集石の下に土壤のあるもの、焼石炉状の集石、多数の石が埋没する土坑などとほぼ円形のプランの柱穴が挙げられる。

これらの時期的前後については、黒色土中からの掘り込みのため判定できなかったが、伴う土器や落ち込み土中の土器片等から、いずれも概ね縄文後期から晩期初頭頃と判断した。

台石を中心とする石組みは多数の石鉢が伴っており、工房跡と考えられ、直径約1mの円形ピット2基については、坑底の土に構造度の高さが認められたことから墓壇の可能性が高く、多数の石礫の雪崩れ込むピットの土では化学分析上での差異がないことから、穀実類の貯蔵穴とも考えられる。

円形に配列する柱穴は、石組み工房跡をとり込む大型の建造物が推察され、その敷地部分は人為的に小砾石を排除して外周に集石したかの如く思われる。そしてその外縁には焼石のみの集合する石組みがあり、屋外炉と思われるが炭片等がほとんど検出されないのは疑問点である。

4. 縄文土器について

出土した土器は縄文前期から晩期に至る山陰・山陽の諸様式がほとんど網羅される結果となった。その間の盛衰を出土数によって示し得るとすれば、最大は後期後半の彦崎KⅡ式から岩田式に至る期間であり、船元Ⅱ式系を中心とする中期前半期がこれに次ぐ。

これらを表示すると次のようである。

表8. 土器様式表

	前期	中期	後期	晩期	
瀬戸内地方 (森・曾根)	羽島下層 磯ノ森 彦崎Z-1 井 I・II	田 船元 果木 II	黒木 III 津	中 福田K-II (月崎上層) 津雲A 彦崎K-II 福田K-III (宮庵)	原下層 黒土B-I (岩山N)
上 鴨 食 道 跡	+ + ○ - + ○ ○ + + + + ○ ○				○ ○ ○

このように山陽における編年様式のほぼすべてを見ることができる。さらに特筆すべきは九州における前期様式である森式系、曾根式系が出土したことあり、特に後者は滑石を多く含む胎土で、原産地から搬入されたものと思われることである。

このように土器様式からすると、中国地方に見られるほぼすべての様式を網羅する代表

的な遺跡であるといえよう。

5. 石器について

石器では石鎌・石匙・石斧などの刃器と、石錐・圓石・磨石・作業台石などの礫器が検出された。

石鎌は鍔形鎌から五角形のものまで新旧多様式があり、石材は加工剝片を加味すると安山岩と黒曜石がほぼ相半ばしている。石匙はわずかに2点であるが、安山岩とメノウを材料としているもので、鎌とともに原石を移入したものと考えられる。石斧は磨製のほか、軟質石材を用いた打製製品があり、後・晚期の所産と思われるが、主として片面加工であることから使途については土掘り具の可能性が高く、注目すべきものといえよう。

本遺跡で最も注目すべきものとして、打欠き石錐の数が多いことである。石組み造構、特に作業台石を数個配置した部位からまとまって出土したものもあり、その加工の場であったと判断される。これらの石材は遺跡地内に散在する河原礫を用いている。

なお、以上の諸点は第一次調査（昭和55年）の成果とほとんど同様である。

6. 中世的建物跡について

調査区の南端（丘陵部）には柱穴群があり、遺物は伴わなかったが、1×2間の建物プランが認められた。この位置は中世の山城三沢要害山の眼下であり、中世以降の幹線通路付近にある。付近には中世の修法遺跡を思わせる渡来鏡や和鏡の出土地があり、また付近は広く小字地名が「堂ノ前」であるなど、中世的な示唆を与えるところである。

以上概観したように、この下鴨倉遺跡は出雲地方山間部にあって、古く縄文前期以降間断なく、縄文晩期に至る縄文時代のはば全期間を知ることができる極めて重要な遺跡といえよう。特にその出土土器については、かつて小林達雄教授が「縄文のデパート」と評されたように、ほとんどの様式が通観されるところである。

また土坑内の土壤分析から埋葬を示唆するものと非なるものの二種が認められ、石組み造構も焼石炉を想わせるものや工房跡もあるなど、特に縄文後期末～晚期初頭の資料が豊富である。なお、このところ匹見町において縄文の石組み事例も検出されつつあり、今後さらに比較検討すべきものである。

石鎌の石材についての産地同定は依頼検討中であるが、肉眼的観察からすると山陰隠岐島産の黒曜石と、瀬戸内産の安山岩とが相半ばしているようである。土器様式では轟式や滑石を混入する曾畠式など九州地方の前期土器が認められるなど、予想以上の広域にわた

る文化交流を示す資料である。

なお、化石花粉の分析や、火山灰層の検討は行っていないが、これらの検討も必要な事項であろう。

表9. 下鴨倉遺跡出土遺物集計表

区	縄文式土器										弥生土器	石器				その他
	前期	中期	後期	晚期部	後晩期	磨	粗	その他の	不規	生		石器	研磨器	石皿	磨石	石斧
	羽破里前 島ノ木下 留森I初	船 元 中	船 元 元	櫛 文	中津彦 福田崎 地	宮岩 田	磨 粗	研 製	不規 生	不規 生	石器	石片	磨石	磨石	石斧	その他
3B										1	1					
4A											1		1			1
B																3
5A																
B																
6A	1 1	1	4	1 1	5 2	4	73		1	21	2 1	4	1			
B			23	2 2	9 1	19	179	4 4	138	5	1 5	13	3			1
7A	3	4	12	1 11	7 21	31	134	2 4	79			4	19	1		
B	1 4	1	10	1 7	7 2	32	169	20 2	80	1	3 12	24	4	12		
8A	1 8 1 1	1 2 2	33	1 7	2 4	25	152	64 5	331	3	1 29	50	9	60		
B	1 11 13		15	52	2	6 50	312	52	92 6	532	16	4 60	34	4	50	
9A	3 4 13	1	25	89	2 6	7 9	87	307	101 3	525	6 1	10 84	39	7	34	
B	4 1 4		1	57	2 1	2 1	52	341	20 9	235	15	48	38	6	14	4
10A	1 3 1		9 4	36	2	3 6	93	368	28 14	340	5 1	1 43	29	19	7	
B	3 1 5 1		2 14	62	2 3	2 1	73	163	33 7	145	4 2	1 72	35	13	24	5
11A	17 5 17	5 2	115	4 17	6 7	206	566	96 15	497	3 1	7 155	59	32	122	3	
B	5 4 20 3			87	4 13	3 1	175	433	65 8	315		5 145	32	24	95	10
Pig内他	1 3		13	15	2 1	1	21	52	7 1	49	1	2	2	6	17	10
計	26 41 82 6	13 32 67	596	23 73	60 59	869	3,251	533	79 3,288	63 7	33 698	375	137	425		
区分合計	155		708	96	119	4,120		3,900			33	375	137			

縄文土器合計 9,098

石器合計 545

主な参考文献

鎌木義昌他	縄文文化（中国地方）—新版考古学講座Ⅲ—	S 44
鎌木・高橋	縄文文化の発展と地域性（瀬戸内）—日本の考古学Ⅱ—	S 40
小林達雄	縄文土器—日本の美術145—	S 53
宍道正年	島根県の縄文土器—松江考古—	S 55
宍道正年	島根県の縄文土器研究の諸問題 —山陰考古学の諸問題（山本清先生壽記念論集）—	S 61
越口清元編	縄文の美と底—原始日本の再発見 I —	S 52
間壁・潮見	縄文文化の発展と地域性（山陰・中国山地）—日本の考古学Ⅲ—	S 40
間壁・間壁	里木貝塚—倉敷考古館研究雑誌7—	S 46
間壁・間壁・藤田	羽島貝塚の資料—倉敷考古館研究雑誌11—	S 50
間壁・間壁・藤田	広江・浜遺跡—倉敷考古館研究雑誌14—	S 54
松崎寿和編	帝釈遺跡群	S 51
瀬見 浩	山口県岩田道路出土縄文時代遺物の研究—広島大学文学部記要18—	S 53
瀬見 浩編	縄文の遺跡（西日本編）	S 60
山本 清	縄文文化—さといん古代史の周辺上—	S 53
近藤義郎他	岡山県史18巻（考古資料編）	S 61
河瀬正利	山陰地方の縄文早期・前期の様相 —山陰考古学の諸問題（山本清先生壽記念論集）—	S 61
河瀬正利	縄文—考古学ジャーナル306—	1989
平井 勝	縄文時代—岡山県の考古学—	S 62
佐賀県立博物館	九州の原始文様展（目録）	S 52
松本雅明編	城南町誌	
坂田邦洋	湖貝塚—一份烟式土器に関する研究—	S 48
中越利夫	帝釈遺跡群出土の縄文前中期土器の研究(1) —広大帝釈遺跡群発掘調査室年報1—	S 60
渡部友千代	石ヶ坪遺跡（発掘調査報告書）	H 2

下鴨倉遺跡土壤分析結果報告書

鳥根大学農学部土壤学研究室

若月利之

1. 目的

平成元年12月1日付け仁教423号により仁多町教育委員会より依頼された以下の土壤標本について、以下の諸点を明らかにすること。

1. 土壤柱状標本9Bと11Bについては層位区分を行い母材の由来を明らかにすること。例えば、この土壤断面の母材は自然の堆積土か、火山灰Ah層を含むか、又河川堆積層との関係は？ 等を調べること。
2. 石組関連土壤については、石組の用途を推定する助けとなるデータを得ること。例えば、これらの石組やピットは埋葬、貯蔵、あるいは炉跡等に用いられたのであろうか等を調査すること。

2. 方法

まず土色（湿润時と乾燥時）、土性、構造等の形態観察を行った後、一般理化学性分析を行った。pHは土壤：蒸留水、1:2.5 (pH-H₂O)、あるいは土壤：1規定KCl、1:2.5 (pH-KCl) の重量比のケンダク液について測定した。pH=pH(H₂O)-pH(KCl)。炭素(C)、窒素(N)は住友化学NCアライザーで測定した。その他の無機元素は土壤を0.2規定の塩酸溶液（土壤：溶液=1:10重量比）で24時間抽出後、抽出液を島津製のICP（プラズマ発光分光分析装置）で分析した。

3. 結果と考察

観察と分析結果を表1、2、3に示した。濃度は105°C乾燥土当りで計算してある。

3-1. 柱状標本9Bと11B

表1と2のデータ、あるいはそれらを図化した図1と2から分かるように黒色の上層は大きく3分される。9Bでは深度約65と110センチ、11Bは深度約75と95センチが境界であると思われる。

3分したうちの下層はマサ土を母材とする砂質の河川堆積物である。

中層には火山灰Ah層が混入していると思われる。このことは希塩酸可溶性の活性

アルミニウム (Al) 含量が 1 %以上となっていることから推定した。りん (P) 濃度この中層で高くなっていることはこの中層の上部がかっての生活面であったことを推定させる。

上層にも火山灰 Ah 層が混入していると思われるが中層のそれとは起源をことにしている可能性が高い。例えば中層の火山灰は姶良やあるいは大山起源、上層は三瓶山起源という可能性もある。しかし詳細の同定には一次鉱物や全分析を行い、標準テフラのそれと比較する必要があろう。

3-2. 石組やピットの用途

表 3 に結果を示した。表の石組関連のデータでは周辺土壤と比較して意味のあるような差異は認められなかった。このことは、表のデータは石組が食糧の貯蔵やが、あるいは埋葬用に使われたのではないことをむしろ裏付けているように思われる。貯蔵庫、炉、あるいは埋葬でも、有機成分や土壤中の移動性の小さいリン等の無機成分の富化のつながると想われるからである。

P17も周辺と比較して顕著な差異は認められなかった。

P13と P16ではピット内の土のリンが周辺と比べて顯著に富化しているのが認められる。このことはこれらのピットが埋葬等に用いられた可能性があることを示している。

表1. 土層柱状標本9日区

No.	深度 cm	水分含量 %	pH (H ₂ O)	pH (KCl)	△pH (KCl)	C %	N %	C/N			Na meq/100g	K meq/100g	Mg meq/100g	Ca meq/100g	S ppm	Fe ppm	P ppm	Mn ppm	Mo ppm	Cu ppm	Zn ppm	Al %
								N	C	N												
1	33.0-43.0	25.6	5.88	4.23	1.65	2.43	0.13	19.2	0.190	0.206	1.26	6.2	2.2	700	28	51	9.0	3.1	6.7	0.58		
2	44.0-54.0	24.0	6.03	4.86	1.17	3.53	0.17	21.2	0.164	0.141	1.13	5.3	4.1	350	55	51	13.2	3.3	4.7	0.86		
3	54.5-64.5	25.6	6.00	4.89	1.11	3.32	0.16	21.7	0.155	0.180	1.00	4.8	5.4	400	54	44	15.6	3.8	3.9	1.01		
4	66.0-76.0	22.5	6.00	5.02	0.98	2.74	0.13	21.4	0.103	0.063	0.62	3.6	11.1	200	112	43	18.3	3.9	2.6	1.21		
5	77.5-87.5	5.2	6.01	5.04	0.97	2.19	0.10	21.6	0.101	0.110	0.51	3.4	14.0	120	129	51	18.6	3.5	1.3	1.23		
6	88.5-98.5	5.7	6.01	4.98	1.03	1.96	0.10	20.4	0.083	0.110	0.40	2.6	10.9	220	136	36	14.0	2.9	1.3	0.91		
7	99.0-109.0	5.8	3.95	5.01	0.94	1.34	0.07	20.6	0.073	0.110	0.40	2.4	8.5	200	156	28	11.9	2.8	1.1	0.78		
8	110.0-120.0	3.1	5.95	5.00	0.95	0.91	0.04	21.7	0.063	0.117	0.35	2.0	4.5	220	121	20	8.6	1.7	0.8	0.60		
9	121.0-131.0	5.1	6.02	4.95	1.07	0.44	0.02	26.0	0.066	0.120	0.32	1.5	4.1	240	107	15	6.6	1.6	0.7	0.46		
10	131.5-141.5	2.8	6.10	4.90	1.20	0.33	0.02	15.5	0.088	0.098	0.35	1.5	5.0	270	96	15	5.6	1.5	0.5	0.40		

9日土層 形態観察

- 黒褐色(7.5YR2.2)泥土、黒褐色(10YR3.3)粘土、粘土、中度中サイズの塊状構造
- 褐色(7.5YR2.1)泥土、暗褐色(10YR3.3)粘土、粘土、中度中サイズの塊状構造
- 黒色(7.5YR2.1)泥土、黒褐色(10YR3.2)粘土、砂質粘土、如膠土、中度中サイズの塊状構造
- 黒色(7.5YR1.7.1)泥土、黒褐色(10YR3.2)粘土、砂質粘土、中度中サイズの塊状構造
- 褐色(7.5YR2.1)泥土、暗褐色(10YR3.2)粘土、砂質粘土、非常に弱度中サイズの塊状構造
- 褐色(10YR2.1)泥土、暗褐色(10YR3.3)粘土、砂質粘土、非常に弱度中サイズの塊状構造
- 黒褐色(10YR2.1)泥土、暗褐色(10YR2.3)粘土、砂質粘土、弱度中サイズの塊状構造
- 黒褐色(10YR2.1)泥土、暗褐色(10YR3.3)粘土、砂質粘土、非常に弱度中サイズの塊状構造
- 黒褐色(10YR3.2)泥土、にごい黄褐色(10YR5.4)粘土、砂壤土、非常に弱度中サイズの塊状構造
- 暗褐色(10YR3.4)泥土、にごい黄褐色(10YR5.4)粘土、砂壤土、非常に弱度中サイズの塊状構造

表2. 土層柱状標本 11B区

No.	深 度 cm	水分含量 %	pH (H ₂ O)	Δ _H H (KCl)	pH (KCl)	C %	N %	C/N	Na %	K %	Mg meq/100g	Ca meq/100g	S ppm	Fe ppm	P ppm	Mn ppm	Mo ppm	Zn ppm	Cu ppm	Al %
1	58.0-61.0	28.6	5.97	4.95	1.02	3.13	0.16	19.9	0.112	0.052	0.76	5.0	4.2	429	49	110	4.1	10.1	0.74	
2	63.0-66.0	25.9	6.12	4.96	1.16	3.03	0.15	20.9	0.132	0.066	0.81	5.5	3.9	230	72	88	12.7	3.3	7.0	0.85
3	68.0-71.0	28.9	6.16	4.98	1.18	3.12	0.15	22.9	0.161	0.061	0.89	5.9	4.7	185	89	66	14.8	3.7	5.3	0.89
4	73.0-76.0	27.1	6.19	5.04	1.15	3.22	0.14	23.5	0.136	0.069	0.85	5.4	5.9	193	110	58	14.3	3.3	4.2	0.94
5	78.0-81.0	24.4	6.24	5.11	1.13	2.69	0.12	23.2	0.168	0.065	0.64	4.4	7.8	116	139	37	15.3	3.1	2.5	1.00
6	83.0-86.0	20.0	6.28	5.12	1.16	2.24	0.09	24.1	0.138	0.069	0.68	4.6	10.0	90	133	24	17.0	3.2	1.7	1.09
7	88.0-91.0	21.9	6.32	5.11	1.21	2.33	0.10	22.4	0.146	0.05	0.83	5.1	6.9	85	137	25	17.0	3.4	1.8	1.16
8	93.0-96.0	13.9	6.34	5.05	1.29	1.30	0.06	23.3	0.125	0.073	0.72	4.0	5.8	81	124	26	15.3	3.0	1.5	1.00
9	98.0-101.0	10.6	6.30	5.05	1.25	1.12	0.06	20.3	0.087	0.05	0.56	2.8	0.7	193	126	26	7.8	2.6	2.0	0.52
10	103.0-106.0	16.5	6.24	4.93	1.31	0.79	0.02	37.6	0.096	0.061	0.55	2.6	5.6	241	150	39	10.9	2.4	1.8	0.73
11	109.0-112.0	16.8	6.21	4.94	1.30	1.25	0.06	19.9	0.068	0.055	0.51	1.8	1.3	322	123	26	7.4	1.9	1.5	0.53

11B土壤 形態観察

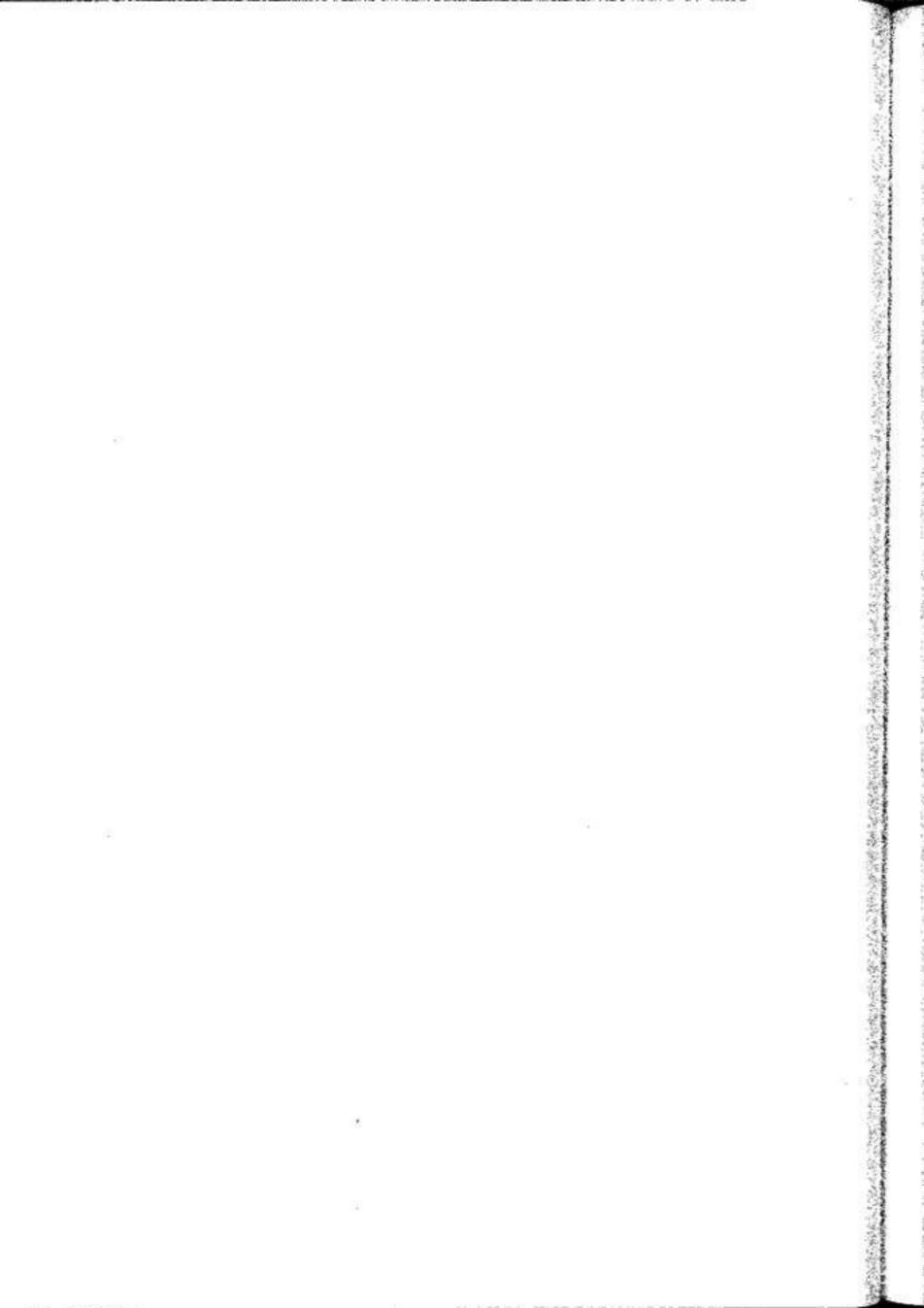
1. 黒色(10YR2/7)泥上、黒褐色(10YR3/2)乾上、褐壤土
2. 黑褐色(10YR2/2)泥上、暗褐色(10YR3/3)乾上、褐壤土
3. 同上
4. 黑色(7.5YR2/7)泥上、黑褐色(10YR3/2)乾上、褐壤土
5. 同上
6. 黑色(7.5YR2/1)湿土、黒褐色(10YR2/2)乾土、砂質原礫上
7. 黑色(7.5YR2/1)湿土、黒褐色(10YR3/2)乾土、砂質原礫上
8. 黑褐色(10YR2/2)泥土、暗褐色(10YR3/3)乾土、砂質原礫土
9. 同上
10. 黑褐色(10YR2/2)湿土、灰黃褐色(10YR4/2)乾土、砂質上
11. 黑褐色(10YR3/2)湿土、灰黃褐色(10YR4/3)乾土、砂質上

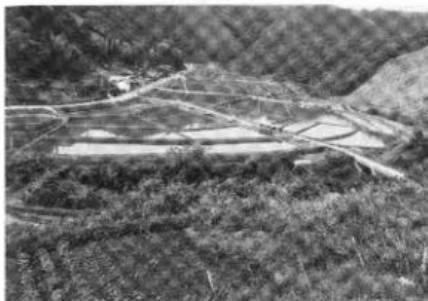
表3. 石組、ピット内土と比較土

No.	水分含量 % [H ₂ O] (kg)	pH [H ₂ O]	pH [KCl]	ΔpH	C	N	C/N	Na	K	Mg	Ca	meq/100g	S	Fe	P	Mn	Mo	Zn	Cu	Al	%
1. 石組 1	17.8	6.48	5.32	1.16	2.06	0.12	17.2	0.103	0.052	0.78	4.0	0.61	140	96	19	11.5	2.3	1.1	0.72		
2. 石組 2	20.4	5.85	4.72	1.13	1.70	0.09	18.5	0.099	0.05	0.28	2.8	0.25	130	106	22	10.2	2.2	1.3	0.68		
3. 石組 3	15.2	6.22	5.07	1.15	1.68	0.09	18.7	0.080	0.05	0.33	2.8	0.25	140	101	25	14.0	2.7	0.9	0.73		
4. 石組 4	17.5	6.20	4.93	1.27	1.96	0.11	17.8	0.132	0.05	0.70	3.4	0.49	130	80	26	9.6	2.3	1.6	0.61		
5. 石組 5 下層	17.9	6.23	4.96	1.38	1.12	0.07	16.0	0.113	0.066	0.59	2.6	0	160	77	20	7.8	2.3	1.6	0.51		
6. 内床面	16.0	6.21	4.91	1.30	0.76	0.05	15.7	0.138	0.092	0.50	2.3	0	160	78	16	7.1	1.9	1.2	0.46		
7. 壁 道	20.4	6.22	4.91	1.31	1.11	0.06	17.6	0.131	0.073	0.63	2.6	0	180	60	18	7.9	2.1	1.1	0.51		
8. P17下層	20.1	6.23	5.05	1.18	1.61	0.08	21.5	0.135	0.05	0.70	3.0	0.25	130	74	13	10.2	2.4	1.1	0.64		
9. 床 面	23.1	6.22	5.03	1.19	1.51	0.08	19.1	0.127	0.05	0.78	2.7	0	170	80	17	8.8	2.2	1.2	0.37		
10. 比 敷	12.3	6.08	4.87	1.21	1.00	0.06	16.6	0.101	0.059	0.46	2.2	4.11	180	119	21	9.7	2.5	1.3	0.63		
11. P13床面	14.9	5.93	4.86	1.07	1.49	0.07	20.7	0.108	0.089	0.52	2.4	4.23	200	175	22	10.8	3.0	1.4	0.69		
12. 比 軒	14.9	6.04	4.85	1.19	0.81	0.04	18.4	0.115	0.058	0.47	2.0	0.82	180	93	14	7.2	2.0	1.1	0.48		
13. P16床面	17.4	6.19	4.90	1.29	1.33	0.06	21.9	0.130	0.05	0.80	2.8	3.39	300	196	29	10.8	4.2	1.7	0.68		
14. 比 軒	14.2	6.25	5.02	1.23	0.84	0.05	18.1	0.106	0.064	0.61	2.2	2.56	240	116	19	8.5	2.1	1.5	0.56		

石組開通土壁 彩色觀察

1. 石組 1. 黑色(7.5YR2/1)湿土、黒褐色(10YR4/3)乾土、砂質壤土
2. 石組 2. 同上
3. 石組 3. 同上
4. 石組 4. 同上
5. 石組 5 下層. 黑褐色(7.5YR2/2)湿土、にぶい黄褐色(10YR4/3)乾土、砂質壤土
6. 石組 5 内表面. 黑褐色(10YR2/2)湿土
7. 石組 5 刃辺. 黑色(10YR2/1)湿土
8. P17下層上. 黑褐色(10YR2/1)湿土、砂質壤土
9. P17床面. 同上の土色、細壤土
10. P17床面. 黑褐色(10YR2/2.5)湿土、にぶい黄褐色(10YR4/3)乾土、砂質壤土
11. P13床面. 黑色(10YR2/1)湿土、灰黃褐色(10YR4/2)乾土、灰壤土
12. P13床面. 黑褐色(10YR2/2)湿土、にぶい黄褐色(10YR4/3)乾土、砂質壤土
13. P16床面. 黑色(10YR2/1)湿土、灰黃褐色(10YR4/2)乾土、細質壤土
14. P16床面. 黑褐色(10YR2/2)湿土、にぶい黄褐色(10YR4/3)乾土、砂質壤土

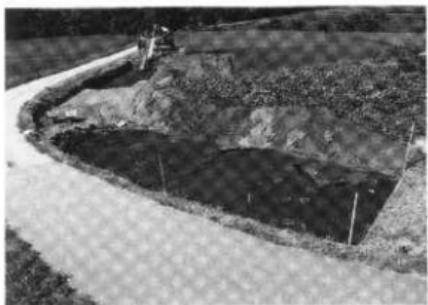




遠 景 (北東から)



3～5区 (北から)



近 景 (南から)



近景 10～12区 (北から)



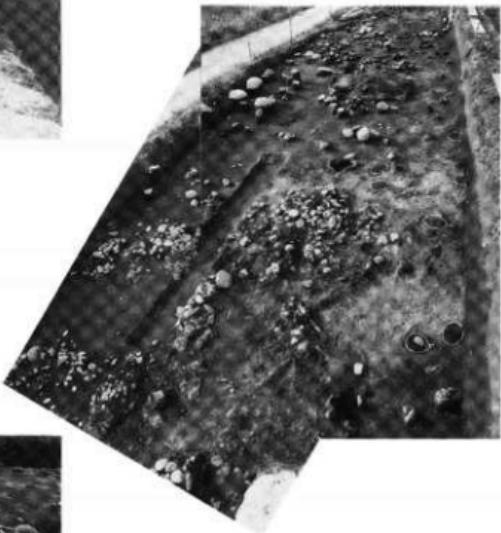
現地説明会



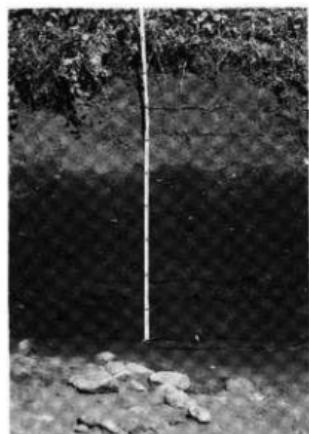
11A区 石組 4 石錘集中出土



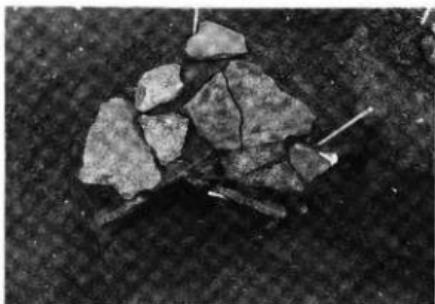
指導会



10~12区 (南から)



11B区 土層断面



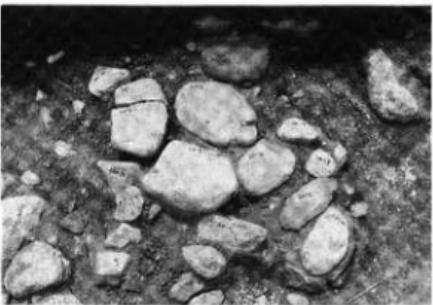
7A区 出土状況



石組 1 断面



11B区 出土状況



石組 2

PL4



P13



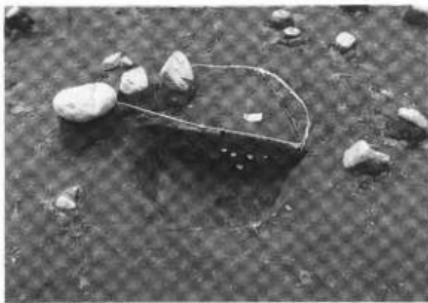
11区 ピット群

P27

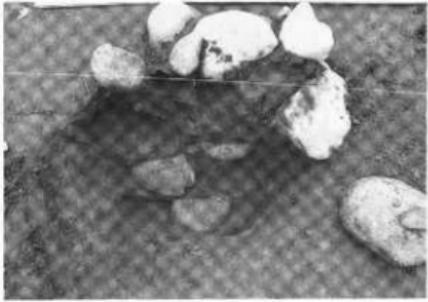
P16 P17



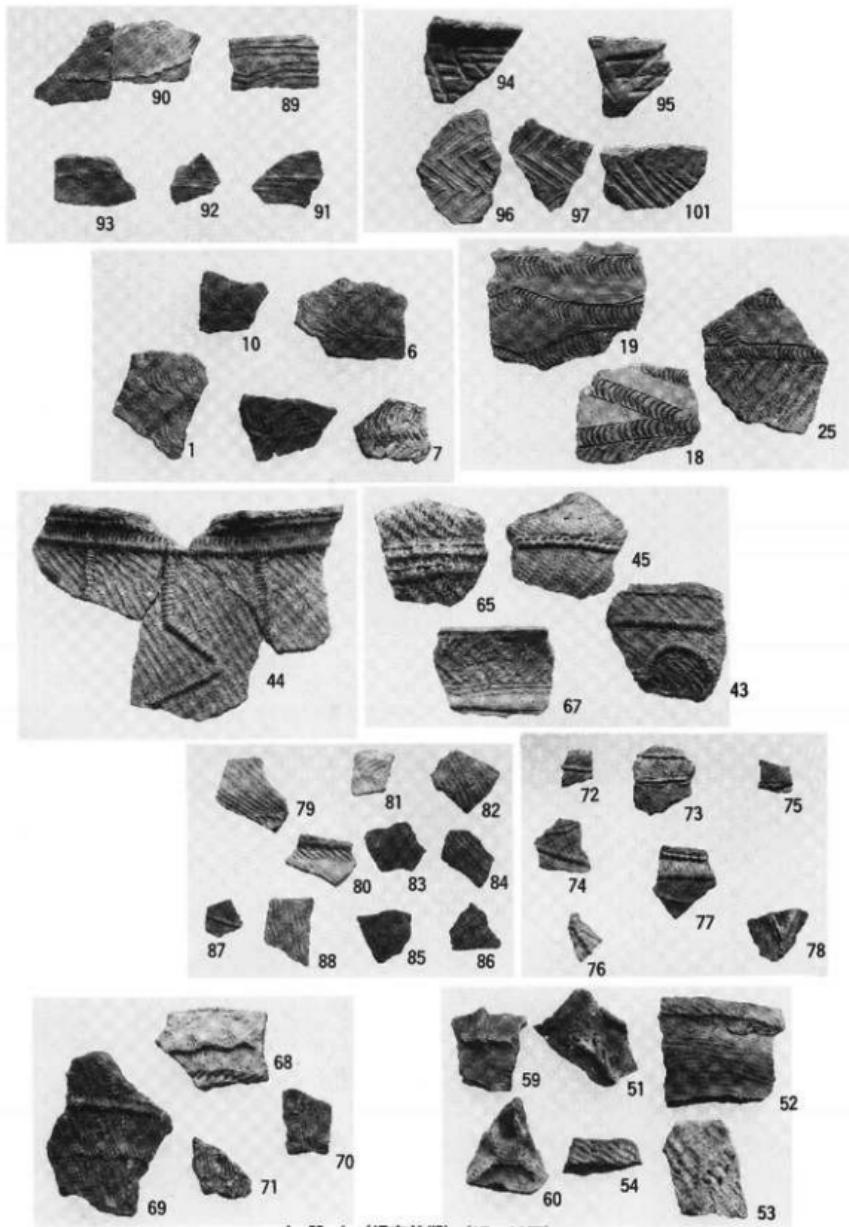
P17



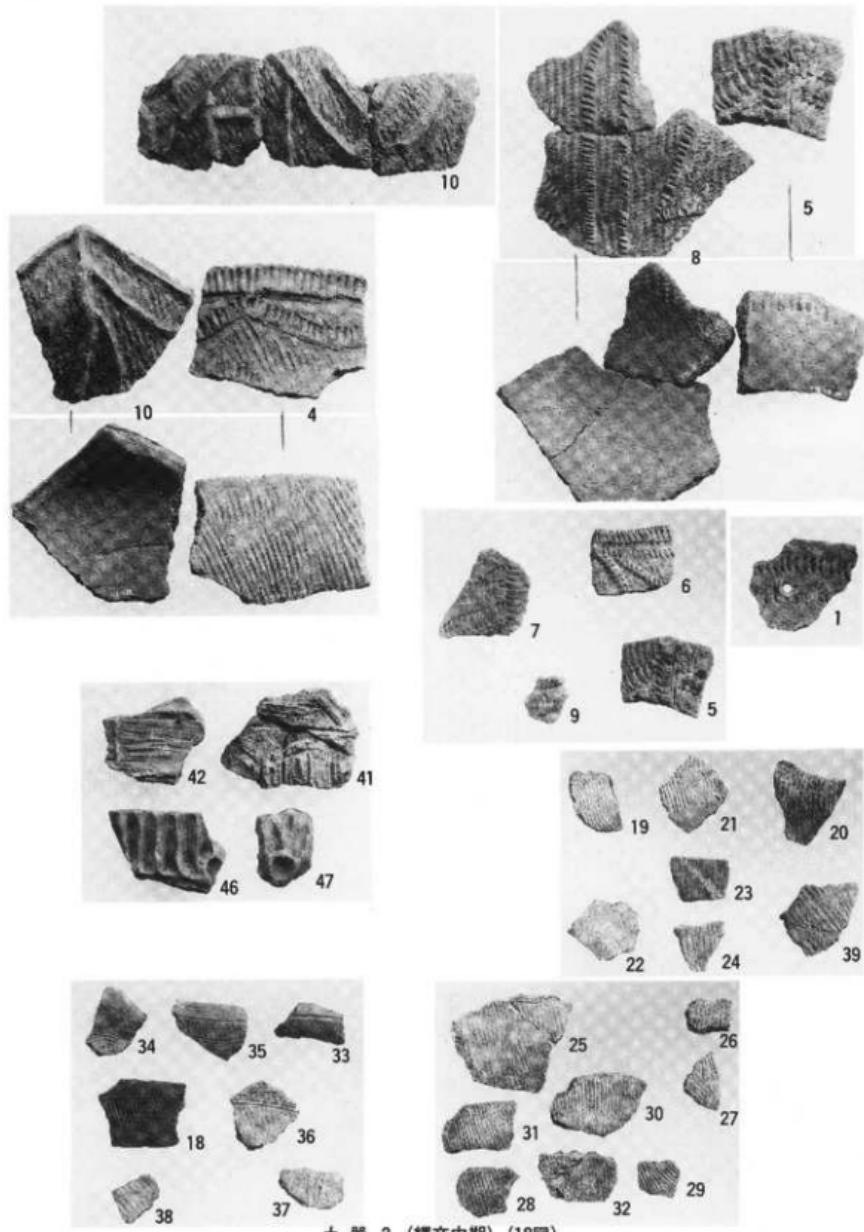
P16



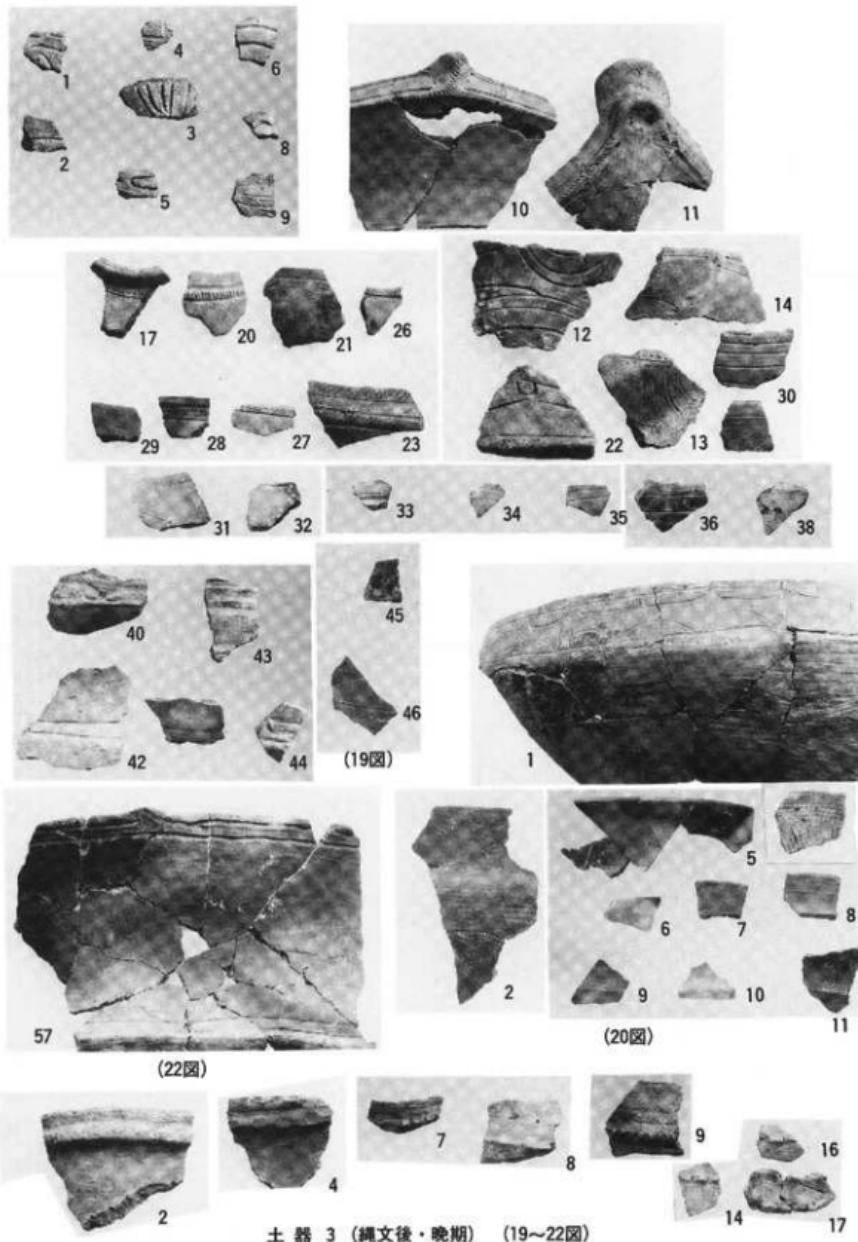
P27

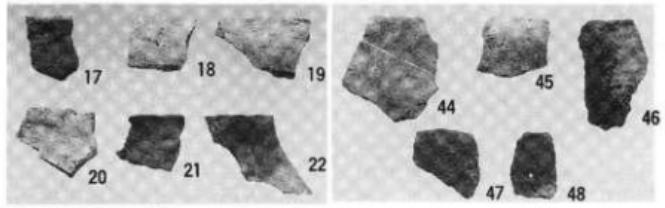


土器 1 (縄文前期) (17・18図)



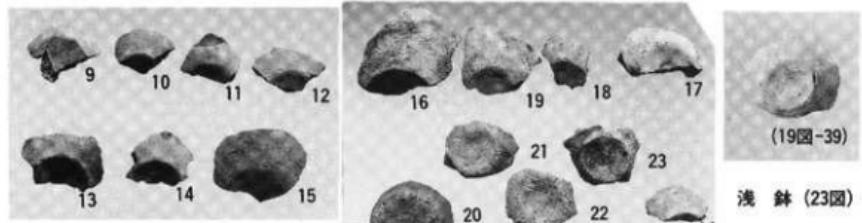
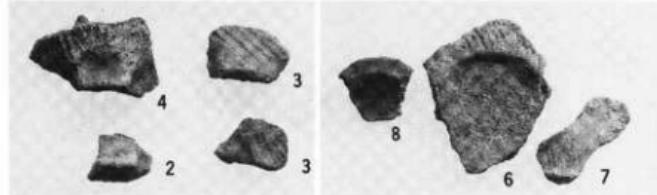
土器 2 (縹文中期) (18図)





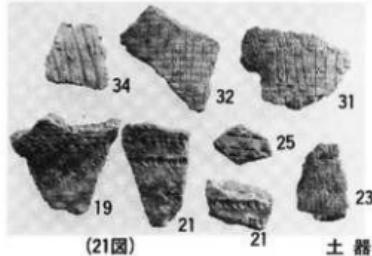
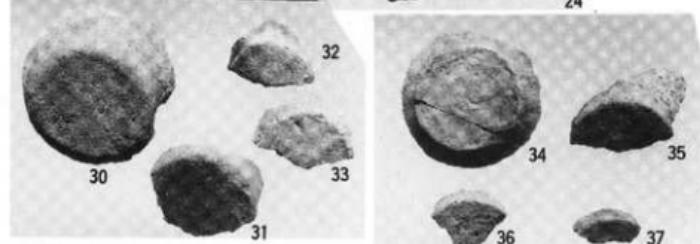
粗製土器 (22図)

前・中期 (23図)



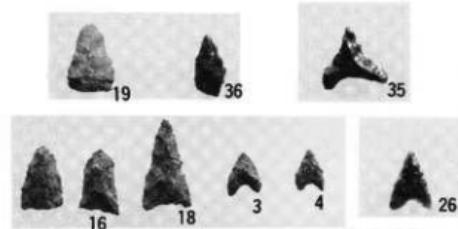
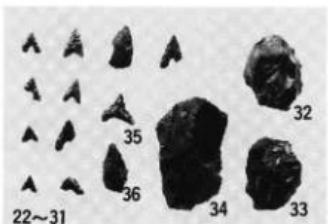
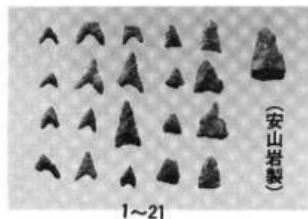
浅鉢 (23図)

深鉢
(23図)

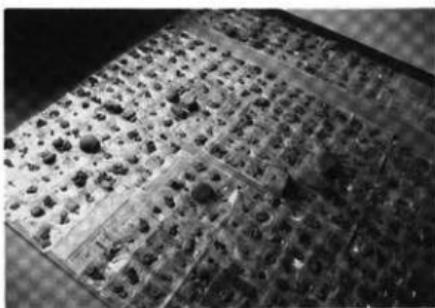
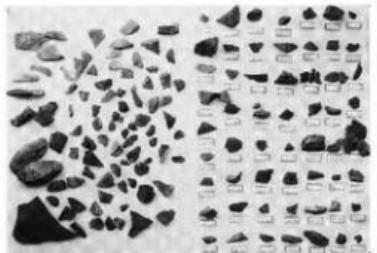
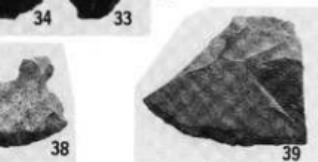


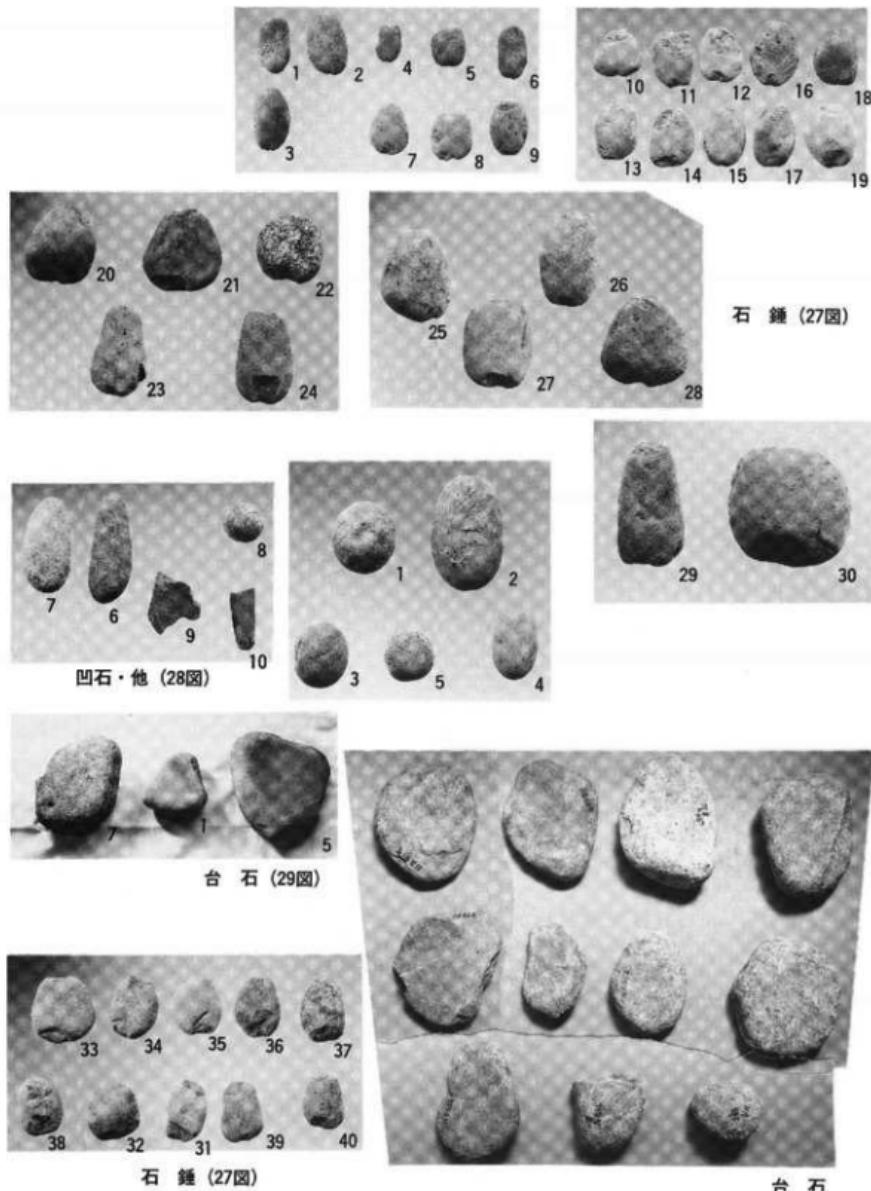
土器4 (縄文粗製・底部) (その他)

弥生土器・
土師器
(24図)



石斧 (26図)





1990年3月発行

道路改良計画に伴う
第2次発掘調査報告

島根県
下鴨倉遺跡

発行 島根県仁多郡仁多町大字三成358-1

仁多町教育委員会

印刷 島根県東石見郡三刀屋町大字三刀屋

木次印刷